
終わりの人形

光太郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

終わりの人形

【Nコード】

N1640C

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

目覚めた人形と、目覚めさせた少女は、世界を見る旅に出る。その終着点で、彼らは何を思いつのか。 【2000年頃執筆】

黒い夜

少年は、それを、当たり前のことだと思っていた。

ただ、そこにあるということに、何の疑問も抱いたことはなかった。

しかし、思うという行為自体、不可能であったのかも知れない。

いまとなつては、それももう、わからない。

男は走っていた。

いまにもなくなつてしまふそんな三日月が頼りなく照らす坂道を、
転がるように駆け抜ける。

「くそつたれが……！」

気づかれたとは限らない。しかし、神殿の門で、人影を見た気が
した。追ってきているかもしれない。

盗みを働いたという事実が、男を疑心暗鬼にさせていた。左右の
木々の間から、追っ手が飛び出してくるような気がして、彼は一層
足を速める。

この森を抜ければ、エーダの町がある。そこまで行けば、大丈夫
だろう。

こんなところで捕まるわけには、いかないのだ。

もう、足の感覚がなくなってきた。この日のために下見を重ね、何度も何度も行き来したはずの道が、異様に長く感じられる。目がかすみ、男は大きく首を左右に振る。景色が幻のようで、現実感がない。

自分は、本当に走っているのか、疲れを感じることにすら遠退いて、わけがわからなくなる。

突然、視界が開けた。男は思わず立ち止まった。

「……なんだ、どうして……」

白い、町だった。不自然なほど広い道の両脇に、白くて四角い建物が、ひっそりと並んでいる。

人の気配や、生活感というものがまったくなく、家々もどれも同じような造りで、店らしきものもなく、灯りなどどこにもついていなかった。

どうしてこんな所に来てしまったのだろうか。あれほど、シミユレーションを重ねたのに、どうしてこの町に来てしまったのか。自分では冷静なつもりだったが、道を間違えるほどに動揺してしまっていたらしい。毎日通い続けたこの町に、いつの間にか足が向かってしまったのだ。男は、唇をかみしめた。

「ここに来るのは、まだ……」

まだ、そのときではない。まだ、早い。

男は激しく頭を振った。そしてまた、走りだす。しかし、立ち止まっていたのがいけなかったのか、途端に足をもつらせて、思い切り転倒した。

静かな町に、地面に激突した音がやけに大きく響いた。急いで立ち上がり、服についた汚れには目もくれず、走りだす。

いまの音で、誰かが気づいたかもしれない。追ってくるかもしれない。追いつかれるかもしれない。男の頭の中で、不安がぐるぐると渦を巻いた。男は、思いを振り切るかのように、ひたすら走った。

もうこれ以上闇が深くなることはないと思われるような、黒い夜

だった。男には永遠かと感じられたその夜も、しかしやがては明けてゆく。

男はまだ知らない。

黒い夜、白い町で犯した過ちを、深く後悔することになるということを。

人形の町

1

そこは、白い町だった。

「今日は、あなたにお別れをいいにきたの」

白い町のなかには、古びた白い家が並んでいた。家はどれも角張っており、植物が根づいているものも少なくない。

「毎日こうやって、あなたに会いにきていたけれど、それも今日でおしまい」

白い家には、誰一人として生きているものは住んでいなかった。

そこにあるのは、いまにも動きだしそうなほどに美しく、しかし決して動くことのない人形だ。

「本当は、ここで暮らしたかったけど……けど、どうしても、やりたいことが、あるの」 白い町の白い家で、人形に向かって話しかけていた少女は、そういつて少し淋しそうに微笑んだ。

少女の頭からは猫の耳のようなものが飛び出し、そして白いスカートのからはやはり猫のような尻尾が覗いていた。ビースルと呼ばれる種族で、普段は集落を形成して暮らしている。しかし少女は一人きりで、人形の前に立っていた。

「ねえ、わたし、あなたみたいになりたいって、ずっと思ってた。

ううん、いまでも思ってる。……だからわたし、リリン・ドゥーアに、行くわ」

少女は、返事をする事のない人形に向かってもう一度微笑むと、最後に、絶対に忘れてしまわないように、大切な人形を見つめた。

少女よりも少し背が高い。白い肌をしていて、大きな帽子の下からは灰色の短い髪が覗いている。瞳は青いが、光がない。白く、薄汚れた衣服を着ており、まるで何気なく壁にもたれているかのよう

だった。

しかし、少女は知っている。一年前、初めてこの町にきたときから、ずっと変わらない世界。この町に住む人形たちは、この少年に限らず、動くことはないのだ。

少女は、ゆっくりと目を閉じて、そしてきびすを返した。振り返ることなく、白い扉をくぐる。

大きく深呼吸をして、後ろ手に扉を閉めた。

胸のなかから、なにかがなくなった気がした。穴が開いた気分だ。二つに結んだ、茶色の髪をふわりと揺らして、少女は広い道を歩きだした。左右には、白くて四角い建物が整然と並んでいる。人形が暮らす町は、普通の町ならばにぎやかであるはずの早朝でも、恐ろしいほど静かだった。

「おや、ミーシャ。今日は早いねえ」

後から声が聞こえてきて、ミーシャと呼ばれた少女は、振り返った。そこにいた老婆を見て、ミーシャは進んだ道を少し戻った。

「お早よう、ヴィオレお婆ちゃん。久しぶりね。会えて良かった」

「ひっひっ。こんな老いばれに会えて良かったなんていうのは、おまえさんぐらいのもんだろうね」

ミーシャは、少し困った顔をした。たしかに、老婆は頭から真っ黒な布をかぶっており、不気味な風体をしている。この町の近くにある森で、隠れて暮らしているらしい老婆は、気が向くと白い家で寝泊りしているようで、毎朝ここにくるミーシャとはときどき顔を合わせていた。

「わたしね、もう、ここにはこないの。旅に出ることにしたのよ」

ミーシャの言葉に、ヴィオレは驚いたように眉を上げた。

「旅に？ 馬鹿いっちゃいけないよ、あんたみたいな小娘が一人で生きていけるほど、世の中は甘くない。けど……そうかい、とうとう、家を出る決心をしたかい。親には？」

「……………」

ミーシャは、目を細めた。怒りとも、悲しみともとれる表情だ。

「いつてない。きつと、わたしが家に帰らないって知ったら、泣いて喜ぶわ」

「……親とはいえ、万能じゃあないんだ、ミーシャ。子どもは、親は完璧だなんて勘違いをしまいがちだけど、親も所詮ひとだよ。愚かで……だからこそ、いとoshii」

ミーシャは微笑んだ。

「妹たちに会えなくなることだけ、心残りだけど。でも、もう、決めたの」

「ああ、あんたのかわいい妹たちのことだけどね……」

黒い布の下で、ヴィオレはおもしろそうに笑った。

「昨夜、この町にきていたようだよ。またガラクタを集めにきたんだろつて。まったく、たいしたいたずら娘たちだよ」

「また、あの子たち……！」

ミーシャは唇を曲げて、頬を膨らませた。あのいとoshii妹たちを、もう叱ることもできないかと思うと、少し淋しかった。いたずらをしてでも何でもいいから、元気でいてほしいと思う。妹たちだけが、ミーシャを慕ってくれる、唯一の味方だったのだ。

「もしまたあの子たちを見かけたら……」

そこまでいいかけて、ミーシャは押し黙った。いいたいことは山ほどある。しかしそれらは、伝えてはいけないことのような気がした。

「……決めたんだろつ？ ならもう、それでいい」

ヴィオレが、やさしく、微笑んでいるのがわかった。ミーシャはうなずいた。

「あ、いけない……！ わたしつたら、荷物を置いてきちゃったわ」

「ひっひっ、先が思いやられるねえ。例の人形のところかい？」

「ええ、たぶん。取りに行かなくちゃ」

ミーシャは、あわてて走りだした。それほど離れてはいなかった。すぐに辿り着く。ちらりと振り返ると、ヴィオレがゆっくりとついてきていた。

「もう、信じられない。本当に、旅なんてできるのかしら」

扉を押し開けて、見慣れた白い家に足を踏み入れる。ひび割れた白い机の上に、茶色い小さな鞆が置かれているのを見つけ、ミーシヤは安堵した。

「ああ、よかった、なかったらどうしようかと……」

鞆に手をのばしかけ、彼女はぴたりとその動きを止めた。瞬くとも忘れ、ゆっくりと記憶をめぐらす。

なにか、違和感があった。ここに入ってきて、まず目にするはずのものがなかった。

「……………」

鼓動が早まった。少しだけ首を動かせば確認できることなのに、どうしても身体が動かない。

外の音など聞こえてこないのではないかと思うほど、鼓動の音が頭のなかで鳴り響いていた。しかしその声は、はっきりと、彼女に届いた。

「君は、だれ？」

少しだけ低い、透き通るような声。ミーシヤは、全身が震えるのを感じた。

「君は、だれ？」

もう一度繰り返されて、ミーシヤはやっと、声のほうに顔を向けた。

思ったとおり、そこには、毎日毎日話しかけてきた少年の姿があった。決して動かないと思われた、人形であった少年は、ミーシヤのすぐ隣で、彼女を見ていた。

「……………あなた……………」

それだけいって、言葉を失う。少年の目には光があった。たしかに、動いている。

少年は、小さく首を傾げた。無表情で、もう一度、問いを口にする。

「君は、だれ？」

「わたしは……わたしは、ミーシャ。あなたの、名前は、なんていうの？」

少年は、少しだけ、微笑んだように見えた。

「ぼくは、ロゼ」

ミーシャには、信じられなかった。これは、夢かもしれないと、遠く意識のなかで、かすかに思った。

白いテーブルの上に、カップが三つ並べられた。座り慣れた椅子に腰かけると、ヴィオレはもう一度、人形であつた少年の顔をしげしげと見つめた。

「しかし……こりゃあ、驚いたね。人形が動きだすなんて、聞いたこともない」

自分のことをいわれているということに気がついていないのか、ロゼと名乗った少年は目の前のティーカップを珍しそうに見ている。代わりにミーシャが、唇を尖らせた。

「いまのいいかた、あまりよくないと思うわ、ヴィオレお婆ちゃん。人形人形って、馬鹿にしているみたいに聞こえる」

「ひっひっ、そりゃあ悪かった。そんなつもりはないよ……ただ、聞いたこともないってのは本当のことさ。それは、あんたもだろう、ミーシャ？」

「……………」

ミーシャは押し黙る。ヴィオレのいつていることは正しい。

白い町で、ロゼが動きだしたことによってミーシャは混乱し、そのまま気を失ってしまったのだ。そこへ現れたヴィオレもやはり驚いたが、とりあえずミーシャをどうにかしなければならぬということ、ヴィオレがこの町にくるたびに勝手に使用している白い家へとやってきていた。

目が覚めたとき、ミーシャはもう一度失神してしまうところだった。自分をここまで運んできたのはロゼだと聞かされ、頭のなかが真っ白になったのだ。

「人形ってというのは、ぼくのこと？」

ロゼが口を開いた。外見から想像するよりも、落ち着いた声だ。

「そう、おまえのことさ。ロゼ……といったねえ？ おまえは、なぜ急に、動きだしたんだい？」

「ヴィオレお婆ちゃん……！」

「おだまり、ミーシャ。この人形はあなたのお気に入りかもしれないが、危険がないとはいいきれないんだよ」

容赦のないヴィオレのいい方にもひるまず、ロゼはゆっくりと瞳を瞬かせた。

「危険？」

「いいのよ、ロゼ。気にしないで」

ヴィオレとミーシャを交互に見つめて、ロゼは無表情のまま少し考えるように口を閉ざした。奇妙な沈黙が落ちる。

「なぜ急に動き出したのか、と聞いたよね？」

逆に問いかけられ、ヴィオレはやや驚いたような顔をしつつも、うなずいた。

「ああ、そうさね」

「それは、つまり、ぼくはいままでは動いてなかったってことだね」

「……………」

ヴィオレは、眉をひそめた。

「……………わからないの？」

ミーシャが問いを口にする。ロゼは首を縦に振り、それからミーシャを見た。

「わからない。きっと、そういうことの違いが、始めからなかったんだと思う」

不思議ないい方だ。自分がどうい存在なのか、何もわかっていないということは確かなようだ。

ヴィオレは、大きくため息を吐いた。立ち上がり、小さな家の奥にある台所から、自らが持ち込んでおいたティーポットを携えて戻ってくる。

「要するに、おまえは、何にもわかつちやいなんだね」

中身が減っていないロゼのティーカップを除いて、あとの二つにハーブティーを注ぎながら、ヴィオレは疲れたようにつぶやいた。

「なら、教えてやるよ、ロゼ。あんたは人形……ドールだ。その大きな帽子を、取ってごらん」

ロゼは、おとなしく帽子を脱ぐと、テーブルの上に置いた。灰色の、やわらかそうな髪が顔になる。

「やっぱり、他のドールと同様、耳は丸いようだね。尻尾もない。まだ子どもだからだろうが、外見はあたしたちデインディゴとまったく同じだ」

ヴィオレもまた、フードを脱いだ。彼女の耳も小さく、丸い。

「デインディゴ？」

「本当に、何も知らないようだねえ……」

目を細め、ヴィオレはひっひつと低く笑った。ロゼは黙っていたが、ミーシャは何となく不愉快になり、下を向いてしまう。

「あたしもおまえもミーシャも、いつちまえは皆ヒトさ。ヒトの定義には色々あるが、見た目があたしらみたいのはひっくるめてヒトって呼ばれる。そのなかでも、いろいろな種族がいるわけさね」

淡々と、ヴィオレが話し始める。ロゼは無表情で、話を聞いているだけだ。

「大昔は、ヒトというのはニンゲンしかいなかったらしい……そのニンゲンの成れの果てが、おまえたちドールさ。そして、あたしはデインディゴ。デインディゴの特徴は色々あるが、見た目は……そうだねえ、だいたいニンゲンと同じだ。ちよいと背が低いぐらいだね。ミーシャのように、獣の耳と尾を持ったものは、ビースルっていうのさ。他にも、たくさんヒトの種類がある……」

ロゼは、話を聞いても何の感情も抱くことができなかった。聞かえてくるものが、すべて新しい知識にしか感じられない。

「いいかい、ロゼ。普通、ドールは、動かないんだ。ヒトの形をしているだけで、決して動くことがない。それが、常識なのさ」

ヴィオレは、正面からロゼを見据えていた。ロゼも、彼女を見つめ返す。

その瞳を見て、ロゼは悟った。どうやら、自分が動いているというこの状況は、歓迎されていないらしい。

「でもぼくは、動いている」

ロゼは事実を口にした。

「いままで、ぼくがどうだったのか、まったくわからない。でもいま、ぼくは動いているよ」

ヴィオレは片方の眉を跳ね上げた。

「それが、異常だつていつてるんだよ、人形のロゼ」

「ヴィオレお婆ちゃん……！」

ミーシャが、ヴィオレを睨みつける。ヴィオレのいい方には、棘がある気がしてならない。しかしヴィオレは、肩をすくめて、そのまま黙ってしまった。

小さく息を吐くと、ヴィオレから目を逸らし、彼女はロゼに向かって小首を傾げる仕草をした。

「ねえ、ロゼ。ちょっと、こっちにきて」

立ち上がり、手を差し伸べる。その様子を見て、ヴィオレが顔色を変えた。

「あんだ……！」

「いいのよ、ヴィオレお婆ちゃん」

ロゼは、差し伸べられた手と、笑顔のミーシャとを、交互に見つめる。この手の意味も、彼女の笑顔の理由も、彼にはまったくわからなかったが、それでもロゼは手を握った。

「……………」

ミーシャは、手を握り返して、それからゆっくりと微笑する。

「うん、思ったとおり」

「……大丈夫なのかい？」

「どうして？」

ミーシャは、ヴィオレにとびきりの笑顔を向けた。

「最高の気分よ、ヴィオレお婆ちゃん！ さあ、ロゼ、こっちよ」
手を引かれるままに、ロゼはミーシャのあとについていった。台所の横の通路を抜け、やはり白い壁の部屋に出る。

そこは、書斎のようだった。たいして大きくもない部屋の四方は、背の高い本棚に囲まれており、中央にある机の向こう側には、ひとりの男がいた。

ロゼは、その男を、じっと見つめた。

「わたしたちと、何も変わらないように見えるでしょう？」

ロゼは、ミーシャの言葉にはこたえず、ゆっくりと男に近づいていく。

隣までくれば、すぐにわかった。男は、ひどく美しい、人形であった。

「これが、ドールよ。決して動きだすことのない人形。さっきまで……あなたも、この男のヒトのように、動かない人形だったのよ」

やはり、ロゼはこたえなかった。しかし、いま目の前にいる男と自分とが、決定的に異なっているという事実が、なぜか重い塊となつて彼の胸に落ちた。

「……………」
ロゼは、そつと、男の頬に手を当てた。

「この『ドール』と、ぼくとは違う。……ぼくは動いている」

ロゼは、すぐ後にミーシャがいることがわかっていたので、そのまま振り返った。そして今度は、彼女の頬に触れた。

「ミーシャと、ぼくとも、違う……………」

ミーシャは、首を左右に振った。

「そんなに、哀しい？ あなたは、動きだしたのよ。それで、いいじゃない」

「……………」

ロゼには、わからなかった。わからないという感情すら、理解できていないのではないかと思うほど、彼は静かに混乱していた。

「ねえ、ロゼ。あなたは、どうしたい？」

ゆつくりと、彼女はそんな問いを口にした。

「……どうしたいって？」

「あなたはきつと、いま生まれたのよ。生まれたからには、やりた
いことやらなきや、損でしょ？」

「生まれた……」

その言葉を、ロゼは頭のなかで繰り返した。それは彼にとって、
ひどく新鮮な響きを持っていた。

「わたしはね、ロゼ。真っ白なあなたに、世界の綺麗なところ、た
くさん見せてあげたい。生まれてきて良かったって、あなたが思え
るように」

ミーシャはそういつて微笑した。

ロゼは、瞳を瞬かせ、ミーシャを見つめる。どうしたいのかなど
と、そんな問いは彼にとってなんの意味もなかった。

「ぼくは……ミーシャと、一緒にいるよ」

それは当然のことのように、彼の口から出た言葉だった。ミーシ
ヤは笑った。

それが、二人の始まりだった。

2

ひとつだけ聞かせておくれと、ヴィオレはロゼを呼び止めた。た
だの人形だった頃の記憶は何もないのかと、それが彼女の問いだっ
た。

ロゼはいった。たったひとつ、覚えていることがあると。

それが何であるのかを聞いて、ヴィオレは笑った。

ミーシャの幸せを願う彼女には、それで充分だった。

季節は春に入っていたが、森の中を歩くにはまだ肌寒かった。草
花は遠慮がちに芽吹き始めていたが、差し込む光は頼りなく、森は
まだ春色に染まることのできないでいる。

その森のなかの小さな道を、ロゼとミーシャは歩いていた。ロゼの姿は、どう見ても森を歩くには適していない。白を基調としたデザインの衣裳は、帽子から靴に至るまで、どこかぞろりとした印象がある。

対して、ミーシャはもともと旅に出るつもりであったので、ずいぶん動きやすい服を着込んでいた。上半身は茶色のベストで引き締められており、手には同じ色のグローブをはめていた。ふわりとした白く短いスカートから飛び出した尻尾は、いまは元気に左右に揺れている。

「ほら、見えてきた！」

ミーシャの猫のような耳が、跳ねるように動いた。ロゼは、彼女の指差す方向に目をやった。

「家が、たくさん見える……」

「エーダの町よ。ビースルとディンディゴが住んでいるの」

町は、いま自分たちがいる森よりも低い場所にあるようだった。茶系統の三角の屋根と、その間に時折木々が見える。中央にある白く大きな建物は、どうやら教会のようだ。

「ああ、どきどきする。わたし、とうとう旅に出たんだわ……！」

ミーシャの頬は少し紅潮していた。町に向かう足が早まる。

「ミーシャは、エーダの町に行くのは初めてなの？」

「初めてじゃ、ないけど。でも、前は保護者が一緒だったから、なんだか初めてって気分」

彼女は微笑んで、それからむりやりのようにロゼの手を取ると、走りだした。長い坂道を、一気に駆け降りる。

町をぐるりとおおっている外壁の、その入り口が見えてきた。入り口の門が自分たちよりも大きく見えるまで走って、やっとミーシャはスピードを落とした。

「はあっ、疲れちゃったね」

そのわりには嬉しそうだ。まったく疲れていなかったの、ロゼは正直に首を左右に振る。

「ぼくは疲れていないよ。ミーシャは、大丈夫？」

「大丈夫よ、わたしが走りたいから走ったの。そういうところ、気遣いはいらぬのよ、ロゼ」

くすぐったそうに笑い、少しだけ尻尾を揺らす。幼さと大人らしさが同居しているような仕草だ。

見上げると、開け放たれた門の両脇に、大きな男が二人、立っていた。右側には小さな石作りの小屋のようなものがあり、その窓から一人の男が顔を出している。

町に入るためには避けて通れない道だった。

ミーシャは、ロゼの手を強く握り締めると、思い切って門の前に立った。ロゼがその横の、少し前に並んだ。

「やあ、こんにちは」

大きな身体をした男は、武装したその風貌には似合わないやさしい声で、二人に話しかけてきた。

極端に短い髪が空に向かって立っており、その下には彫りの深い顔立ちがあった。狼のような耳をもつ、ビースルだ。ロゼの数十倍はあろうという筋肉を、袖のない薄茶色の衣服が包んでいる。金属でできた胸当てをはめて、手には長い槍を携えていた。

この町は、そんなに危険なのだろうか、ちらりとミーシャは思う。

「お父さんや、お母さんは、いないのかな？」

男は二人を見下ろした。ロゼが無言で見つめ返してきたので、ミーシャに視線を向けることにする。

「わたしたち二人だけです。町には、入れないんですか？」

「そうかい。いや、もちろん入れるとも。名前と出身地、種族をリストに書かせてもらうがね。簡単な手続きだ。名前は？」

小屋の窓から、痩せたディンディゴの男がリストをさしだした。それを受け取りながら、質問してくる。

「ミーシャ。出身地は……セプテン。種族はビースルです」

「へえ、神殿の生まれなのかい」

「……………」

ミーシャはうつむいた。それをうなずいたのだと解釈して、男はロゼを見る。

「君は？」

「ぼくは」

「この子はロゼ。出身地はセプテン。種族はディンディゴよ」

ロゼを遮って、ミーシャは一気にまくしたてた。

「ふむ……なるほど」

それだけいって、男はさらさらとリストに記す。たったの数秒が、ミーシャにはひどく長く感じられた。

やがて男はリストを窓の男に手渡すと、二人に笑いかけた。

「さあ、手続きは終わりだ。町に入って少し東にいったところに、宿場がある。あてがないなら、まずは今日の寝る場所を確保することだね」

「ありがとう、おじさん」

にこりとミーシャが笑い、その横でロゼが頭を下げる。二人は、少しだけ緊張しながら、門をくぐった。

「……セプテンというのが、ぼくの出身地なの？」

「そんなの、知ってるわけじゃないでしょ。適当にいったのよ。種族だって、ディンディゴだなんて嘘ついちゃったわ」

ミーシャは、ペろりと舌を出した。

町のなかにはたくさんの人が行き交っており、ずいぶん賑わっていた。三角屋根の家々を通り過ぎ、店が立ち並ぶ広場へと出る。茶色い町だ、とロゼは思った。ほとんどの建物が茶系統で統一されているので、店の入り口の上にかかっている看板の白い色が印象的だ。

広場の中央には、大きな噴水があった。店は、その噴水を遠巻きに取り囲むようにしてぐるりと建っており、店と噴水の間の広場には、たくさんの人が集まってきていた。

「たくさん人がいるわね……なにかあったのかな」

ミーシャが、うんざりした調子でつぶやく。人の多い場所は好きではない。

広場を通過しようと足を速めると、若い男の声飛び込んできた。「間違いねえよ、神殿仕えのやつが話してるのを聞いたんだ！」

ミーシャは立ち止まり、声のする方向に目を向ける。ロゼもつられてそちらを見た。

二十代ほどのブースルだ。噴水の前の、一段高くなっているところに立ち、何かわめいている。この人混みは、どうやらその男の話の聞こえというものらしかった。

「でも、それが本当だとしたら……」

「ねえ……」

男の話を聞いている人々が、不安げに顔を見合わせている。興味を引かれ、二人はもつと近づいてみることにした。

「信じるか信じないかは勝手だが、いまごろ神殿は必死に犯人探ししてるはずだぜ。セプテンのご加護もなくなつちまうってことだからな……まったく、大変なことになりやがったよ……！」

「……セプテンって、ミーシャの生まれた場所だね。ゴ加護があるの？」

「神の名前でもあるの。神殿のある町の名前として、さつきは使ったけど」

ロゼの問いに答えながらも、ミーシャは男を凝視していた。

「セプテンで、何があつたのかしら……」

「それが、大変らしいわよ」

聞いてもいないのに、ミーシャのつぶやきを聞きつけて、前にいた女性が振り返ってきた。

「神殿のエスペランスが、盗まれたらしいの。あの人、神殿仕えの人たちが話しているのを聞いたんですって」

「……エスペランスが……」

ミーシャは、声を搾り出した。エスペランスとは、セプテン神が創造したといわれる奇跡の腕輪だ。その力で、セプテンを信仰する

者は幸福と幸福の心とを授かるといわれている。

それが盗まれたというのは、セプテンにとって大変な事件だった。「神殿はどうなってしまふのかしら……奇跡の神子様も不在のままでしょう？」ああ、私たちは本当に、セプテンに救われるのかしら

……」

吐き気がして、ミーシャはうつむいた。そうやって、一生、目に見えないものに頼っていればいい　気分が悪くなった。やはり人混みは、好きではない。

「行こう、ミーシャ」

ミーシャの手をつかみ、ロゼは歩きだす。驚いたように、ミーシャは彼の顔を見上げた。

「……うん」

二人はできるだけ急いで、門番に教わった宿場へと向かった。

ロゼとミーシャが歩き去り、その姿が見えなくなった。ちょうどそのときに、一人の少年が広場に現れた。栗色の、少し長めの髪を、後で束ねている。年齢は、十代半ばほどだろうが、ぶかぶかの上着を着込んでいるので、それよりも幼く見える。耳は丸く、背も高くはなかった。

「……」

少年は、ひょいと背伸びして、二人の姿が消えた方向を見た。宿に行っただのは間違いない。それを確認してから、先程から噴水の前でわめいている男に向き直った。

「……幸せだねえ、まったく」

馬鹿にしたように、つぶやく。ぎりぎり男の耳まで届くような、声の大きさだった。

「なんだって……？」

直観的に、自分のことをいわれたのだとわかった。眉をひそめて、男が声の聞こえてきた方を見る。続いて、笑い声が聞こえたような気がした。しかしそこには、誰もいなかった。

「なんだよ、誰かなんかいったか？」

男は、首を傾げつつ、周囲の者に尋ねる。しかし皆、首を左右に振るので、気のせいだったということにしてしまった。

その様子を、数メートル離れた店の屋根の上から眺め、少年は唇の端を上げた。彼は嘲りともとれる表情で、もう一度つぶやいた。

「シアワセだっつたんだよ、ばーか」

3

すべてのカーテンを閉めきつた、光の届かない小さな部屋で、男は膝を抱えていた。誤算だった。数年前に訪れたときは、町に入るための審査など何もなかったのに。

「……ちくしょう」

とつさに、偽名を使ってしまった。しばらくはそれで誤魔化せるだろう。しかし、いつばれるかわからない。いつ、追ってくるかわからない。

黒い前髪の下から、ぎよろりとした鋭い目で、男は床に散らばった自らの荷物を見た。

視線はそのまま、ゆっくりと立ち上がる。痩せた、デインディゴの男だ。歳は三十歳ぐらいだろう。

「……何が、いけなかった……何から、狂い始めた……完璧だったはずだ、完璧だったはずだ……」

しかし、歯車は確実に狂い始めていた。

「ちくしょう……」

荷物を見下ろす。硬貨と、ほんの少しの着替え、そして保存食が転がっていた。

それだけだった。

逃げてくる途中で、落としてしまったのだ。それは間違いない。では、どこで？ いつ、落とした？

「……………」

わかっていた。昨夜、白い町で落とされたのだ。あるうことが、自分はその場で転んでしまったのだ。

しかし、もう追っ手は動き始めているはずだった。いまから白い町まで探しに戻るのには、あまりにも危険だ。

だがそれでも、彼は戻らなければならなかった。

「絶対に、手に入れてやる……」

うなるような低い声で、男はつぶやいた。

「エスペランスは、オレのものだ」

*

「ちよつとねえ、悪いけど、泊めるわけにはいかないね」

カウンターの男に断られ、ミーシャは肩を落とした。わかりました、と力のない返事をして、二人はそのまま、宿を出る。

もうこれで、三件目だった。理由はどれも、こどもだけでは泊められないというものだ。要するに、信用がないのだろう。

そんなのはおかしいと、ミーシャは思う。大人にだって、色々問題を起こす人はいるはずだ。たった数年、生きてきた年数が少ないだけで、差別を受けるいわれはないではないか。

「また、駄目だったね」

淡々と、ロゼがそんなことをいう。特に悔しがっている様子もない。それがおかしくて、ミーシャはくすりと笑った。

「日が暮れるまでに、見つけなくちゃね。どうしても駄目だったら、馬小屋でも何でもいいから、屋根のあるところを借りましょ」

「でも、それじゃあ……」

「ちよつと、そのボクたち？」

突然、背後から呼び止められ、二人は立ち止まった。振り返ると、ミーシャの母親ぐらいの年齢の女性がいた。ディンディゴのようだ。「なんですか？」

ミーシャが、ロゼより一歩前が出る。赤茶色の髪の毛を揺らして、

その女性は困ったように笑った。

「あら、そんな、構えないで。聞こえちゃったんだけど、宿を探してるのよね？ こどもたちだけで、宿なんて見つからないわよ。皆ね、お金のことを気にしてるの。それに、たとえば何か起こったとき、あなたたちには責任がとれないし」

「……そう、ですか」

ミーシャは、唇を噛み締める。こどもだというだけで、こんなにも扱いが違うとは思わなかった。

「それでね、もし良かったら、なんだけど……」

膝に手を置き、少し屈んで二人の顔を覗き込むと、その女性はやさしく微笑んだ。

「私の家に、来ない？ 見ててね、かわいそうになっちゃったの。すぐそこで、母と二人で住んでるんだけど……どう？」

「え……」

小さく声を発して、ミーシャが黙ってしまう。それは願ってもないことだが、しかし、見ず知らずの人に甘えるわけにもいかない。

「ね、遠慮しないで。最近うちの子が家を出ていっちゃってね、すごく淋しいのよ。人助けだと思って……どう？」

ロゼは、ただ黙って、その様子を見ていた。人のやさしさというものかわからない。彼の目には、それはとても奇怪なものに映っていた。

「あの……本当に、いいんですか？」

「もちろんよ！ じゃあ、来てくれるのね？ 素敵な食事をご馳走するわ。私、こう見えてもお料理上手なのよ！」

「ありがとうございます」

はにかむように、ミーシャは笑った。

その女性は、アリアと名乗った。彼女の家は、宿場から少しだけ離れた、静かな通りに面したところに建っていた。白と茶の煉瓦で造られた、小さくて可愛らしい家だ。まだ新しいのか、壁は少しし

か黒ずんでおらず、門にあしらってある銀色のささやかな装飾も、造りたてのようにぴかぴかだった。

「さあ、この部屋を、好きに使ってちょうだい。あとから毛布を持つてくるから、奥のベッドを使ってね」

二人を二階の客間らしき部屋に通すと、アリアはそっぴい残して、部屋から出ていった。

残された二人に、沈黙が訪れた。顔を見合わせて、ミーシャは大きく息を吐く。

嘘みたいだ。

「どこの宿にも泊まれないから、どうしようって思ってたけど……」

「やさしい人だね。ヒトは、みんな、こんなふうにやさしいの？」

「そんなことはないわ」

冗談めかして笑って、ミーシャは目を細める。ロゼは帽子を脱ぐと、緑色のソファの上に置き、自分も腰かけた。

「じゃあ、どうしてだろう」

「どうしてって？」

ミーシャも、ロゼの隣に腰をおろした。部屋にあるソファは、三人がけのこの緑色のものだけだ。

「どうしてあの人は、やさしいんだろう」

ミーシャは、首を傾げた。

「どうしてってことは……ないんじゃないかな。きつと、理由なんてないのよ。世の中には、アリアさんみたいにやさしい人もいるってことね」

ふうんと、たいしてわかってもないような返事をよこし、ロゼはそのまま口を閉ざす。彼にとってアリアの行為は、理解の範疇を超えていた。

「もう、日が暮れるわね……今日は、本当に、いろんなことがあったわ」

窓の外の、赤く染まり始めた空を見てつぶやくと、ミーシャは口ゼに視線を移した。

「ねえ、ロゼ」

呼びかける。ロゼは何気ない仕草で、顔を向けた。

「あなたは、いま、どんなことを考えているの？」

「……………」

質問の意味がわからない。それが伝わったのか、ミーシャは苦笑した。

「困るわよね、そんなの。なんていうのかな……………いままでは、きっと、あなたの時間は止まっていたでしょう？ 今日、あなたが生まれたことには、意味があると思うのよ。動きだしたあなたは、どういふことを考えるのかなあって、思ったの」

「……………」

長い、沈黙があった。ゆっくりと自分の心に耳を傾けて、それからロゼは首を左右に振った。

「わからないよ……………いままでのぼくがどうだったのか、いまのぼくとは違うのか。ただ、人をたくさん見ても、人と話しても、初めてって感じじゃなくて……………懐かしい、ような気がする」

それは、質問のこたえにはなっていないかった。しかしミーシャは、そうよね、と微笑んだ。

料理をしているアリアの後ろ姿に、ひとりの老婆が話しかけた。

「人数は？」

アリアは、少しだけ振り返って、老婆に微笑みかける。サラダを容器に移し替えながら、答えた。

「二人よ、お母さん。とてもかわいいビースルの女の子と、頭の良さそうなディンディゴの男の子」

「そうかい」

短い会話だった。木製の杖をつきながら、老婆はアリアに背を向ける。振り返らずに、最後に一言、つぶやいた。

「……………もう、これで、最後だよ」

アリアは、自嘲するように頷いた。。

夕飯に呼ばれ、下の階のダイニングへと赴くと、丸いテーブルの上に、四人分の豪華な食事が並んでいた。わぁっと、思わずミーシヤが歓声をあげる。

「ふふ、どう？ おばさん、頑張って作っちゃった」

椅子を引いて二人を促し、アリアは楽しそうに笑った。最後にコップに葡萄のジュースを注ぎ、自らも椅子に腰かける。その隣には、五十歳ほどの女性が座っていた。

「紹介するわね、私の母よ」

「いらっしやい。よくきてくれたね」

ルシアと名乗り、アリアの母は目を細めて二人を見た。痩せた女性だ。手はしわくちやで、骨の形がはっきりとわかるかのようだった。

「ミーシヤです。今日は、お世話になります」

ミーシヤにあわせて、ロゼも頭を下げる。

「今日といわず、好きだけゆっくりしていいのよ」

本気なのか、冗談なのか、とにかく楽しそうに、アリアがいう。

何だか嬉しくなって、ミーシヤはもう一度お礼をいった。

「さあさ、準備はこれでいいわね」

ゆっくりと、食卓についた面々の顔を見てから、アリアは目を閉じた。右手を胸に、左手を額の下のあたりにあてる。

食事の前に行なう、セプテンへの祈りだ。

「……………」

静かに、アリアは祈った。見ると、ルシアも同じ仕草をしていた。左手をおろし、右手の上に重ねる。

ロゼにとっては不思議な光景だった。ミーシヤは、最初のうちは仕草なく仕草を真似したが、すぐにやめてしまった。

アリアとルシアは、目を開けた。

「さあ、食べましょうか」

それは、ロゼの記憶のなかでは初めての、ミーシヤにとっては本

当に久しぶりの、絵に描いたような幸せな食事だった。大きな器に盛られたサラダを、順番にアリアがよそうという、たったそれだけのことが、ひどく新鮮に感じられた。

「……最近、こどもが家を出ていったっていったけど、どうして？」

黙って食事をとっていたロゼが、唐突に口を開いた。それは、ずいぶんと無遠慮な質問だったので、ミーシャが咎めるような目を向ける。しかしロゼはじつとアリアを見ていた。

一瞬、アリアの笑顔が止まったように見えた。しかしそれは、本当に一瞬のことだった。

「一人息子が、いたんだけどねえ。ひとりで旅に出たわ。世界を、見たいんですって」

「……………」

じつと、ロゼがアリアを見る。それからルシアを見て、もう一度視線を戻し、彼ははにかんだように少しだけ笑った。

「じゃあ、ぼくらと一緒にだ」

話を聞いていないわけではなかったが、ミーシャが思ったのは、そんなふうには笑うこともできるんだ、ということだった。

昨日までは笑うことすらない人形であったという事実が、嘘のようだ。

「あなたたちも、旅をしているのよね？ どこか、目的地はあるの？」

「目的地……………」

尋ねられ、ロゼは黙ってしまう。代わりにミーシャがいった。

「リリン・ドゥーアに、行こうと思っています」

「まあ…………東の果てじゃないの。リリン・ドゥーアなんて、何もないでしょう？」

「ええ…………でも」

ミーシャはゆっくりと笑んだ。少し寂しげな笑顔だと、ロゼは思う。

「その道中で、世界を、見たいんです。世界の綺麗なところを、たくさん。それに、どうしても……リリンに、行きたくて」

ガチャンと、音が響いた。見ると、ルシアの目の前にあるスープの皿が、倒れてしまっていた。

「あら、やだ、お母さんったら。大丈夫？」

どうやら、フォークを落としてしまい、それが皿にあたって倒れたらしい。あわてて立ち上がり、エリアがタオルを持ってくる。

暖かい、家族の光景だ。

家族というのは、本当は、こういうものなのだろう。そう思い、少しだけ、ミーシャは瞳を伏せる。

二人の旅の一日目は、こうして静かに、終わりを告げようとしていた。

少なくともミーシャは、そう思っていた。

「ぼくにはわからないよ、ミーシャ」

食事を終え、部屋へと戻る階段で、ロゼはそうつぶやいた。何がと問われて、彼は首を左右に振る。

「そういう、ものかな……人のやさしさというものは、そういうものなのかな。ぼくが人形だったからかもしれないけど……わからないんだ」

「深く、考えることないわよ。きっと淋しかったのよ、息子さんが行っちゃって」

「……うん。そう、かな」

そうよ、とミーシャが尻尾を振る。そのまま、階段を上って一つめの部屋の扉を開け、彼女は驚いて立ち止まった。

がらんとした部屋だった。青いカーテンと、青いベッドがある。ベッドの上には、綺麗に畳まれた寝巻が置かれていた。横にはタンスト、背の低い棚があり、棚には本が並べられている。絵本のようだ。その上には、玩具の詰まった箱が置かれている。

子供部屋だ。

「部屋、間違えてるよ」

「……みたいね」

アリアの一人息子の部屋なのだろう。しかし、それにしても、奇妙だった。

どう見ても、五、六歳ほどのこどもの部屋だ。こんな幸せそうな家庭の、幼いこどもが、旅になど出るだろうか。

「……ロゼ」

呼びかける。ロゼは返事をしなかったが、かまわずにミーシャは続けた。

「先に、部屋に行つててくれる？ アリアさんに、用事を思い出したわ」

ロゼは、やはり答えずに、静かにミーシャを見た。

ミーシャがキッチンに入ると、アリアはちょうど紅茶をいれているところだった。気配に気づき、ぎくりとして振り返る。

ミーシャは、耳をぴよこりと揺らした。

「ねえ、アリアさん」

「な、なあに、ミーシャちゃん」

動揺している。気づかないふりをして、ミーシャは上目遣いにアリアを見た。

「ロゼがね、わからないっていうの。アリアさんたちのやさしさがわからないって。あの子は、人とあまり接したことないから、それも仕方ないと思うわ。でもわたしは、感謝してる」

「……？ え、ええ」

よく、意味がわからない。ミーシャが近づいてきて、そっとアリアの腕に触れた。

「だから、信じようって決めてたの……本当よ、本当に……」

ミーシャは、ひどく哀しげに、眉を歪めた。

「……こんなことしたくなかったのよ」

「どうしたの、ミーシャちゃん？ 何かあったの？」

心の声が鮮明に聞こえてきて、ミーシャは静かに笑った。

「わたしね、こうやって触ると、人の考えてること、わかっちゃうの。心の声が聞こえるのよ。だから、もう、わかっちゃった」

「な……」

とつさに、アリアが手を払おうとしたが、予想外に力強く、ミーシャは彼女の腕を握り締めていた。

「その紅茶、わたしたちにくれるつもりだったのね。そう……眠り薬が入っているの……」

「……！ 離さない！」

「ああ、驚いてるわね。気味が悪い？ そうでしょう。そんなに恐がらないでも大丈夫よ」

「やめて……！」

ミーシャはやめなかった。爪が食い込むほどにアリアの腕を握り締め、淡々と続けた。

「あなた、人身売買なんてやっているの？ セプテンに祈りを捧げているくせに、セプテンの意に背いてるのね。……ああ、そう、一人息子も、人買いに売ってしまったの……」「やめて！」

ミーシャは手を離れた。震えるアリアを、淋しそうに見つめた。

「お金、そんなに大事？ お金さえあれば幸せ？ わたしはあなたを責めないわよ。わたしはあなたの人生に、干渉する気はないもの」

真つすぐアリアの目を見て、ミーシャは辛辣な言葉を吐いた。それだけだ。もう、彼女を見るのもいやだった。

振り返ると、ルシアが、呆然とした面持ちで立っていた。そのすぐ隣を、ミーシャはゆっくりと歩き去る。

「じゃあ、どうすればよかったのよ……？」

アリアが叫んだ。

「どうすればよかったのっ？ 聞いたことあるわ、人の心がわかるって……、あなた、セプテンの神子様でしょう？ 教えてよ、ダンナが金貸しから大借金して、蒸発して、残ったわたしはどうすればよかったの？ 首を括って死ねばよかったの？ 救いの手を差

し伸べてよ、セプテン様に、こんなにも、祈りを捧げているのに……！」

ミーシャはアリアを見て、唇の端を上げた。ひどく冷たい笑みだ。「あなたは何もわかっていない。それにわたしは、あなたの人生に干渉する気はない。勝手に人をさらって、人買いに突き出して、しあわせになりなさい」

とても、十代前半の少女の言葉とは思えなかった。ミーシャはきびすを返し、それきり振り向くことなく、キッチンから出る。

そこには、ロゼがいた。ミーシャの、感情のない顔を見て、ロゼは哀しそうに目を細めた。

「泣いているの？」

ミーシャは、もう一度笑った。

「ロゼにね、世界の綺麗なところを、たくさん見せたいと思ってたの。わたしは、汚いところしか知らないから。でも、無理かも、しれないね」

それは、セプテン神殿で奇跡の神子として崇められた、人の心の声を聞くことのできる少女の、静かな悟りだった。

「行くう」

ロゼが、ミーシャの手を握る。真っ白な、暖かい気持ちの流れこんできて、ミーシャはやっと、泣いた。

*

日は落ちていた。

暗やみの町を、寢床を求めて歩きだした二人を見て、少年は屋根の上で舌打ちした。

「もうちよっと、物事考えりゃあいいのに。余計な苦労かけさせんなよな……」

呟き、屋根の上を移動する。素早く、確実な動きであるにもかかわらず、彼は物音ひとつたててはいなかった。

そうして、二人の視界ぎりぎりのところにわざと着地し、さっと身を隠す。

五感に優れているビースルの少女が、それに気づいた。思惑どおりだ。

「いま、何か、動かなかった？」

「……？ ぼくは気がつかなかったけど」

たしかに何か動いたはず、といいながら、少女が近づいてくる。

大きな帽子をかぶった少年もそれに続いた。

それを確認して、彼は再びぎりぎりのところで跳躍した。

「ほら、やっぱり何かいる！」

今度は走りだす。うまく追ってこられるように、器用に進路を変えつつ、彼は移動した。

何度か繰り返すうちに、目的地に辿り着いた。彼はその扉を少しだけ開けて、屋根の上に身を隠す。

二人が現れた。しかし、そこには誰の姿もなく、やわらかい光のもれる建物があるのみだった。

「宿だわ……」

「小さいね」

「泊めてもらえるかどうか、頼んでみましょう」

そうして、二人は建物の中に入っていった。

それを見届けて、少年は小さく息をつく。

「そう、それでいい……その宿なら安心だ。頑張れよ、お二人さん」

空を仰いだ。雲が多いのか、星は見えなかった。

見るものを圧倒するその巨大な建物は、セプテンと呼ばれる。入り口には、空にとどくのではないかと思われるほどの大きな門があった。その門には神聖な装飾が施されており、門から入り口にかけて続く半円形のステンドグラスからは、静かに光が洩れていた。

その中央に、女がいた。赤い髪の女だ。額には金の輪をはめ、腰には太いベルトをまいており、そこから大きな剣をぶら下げている。身軽そうな短いスカートからは、すらりとした足がのびていた。厳しい目をした、デインデイゴの女だ。

女は、見事な装飾の門にも、天井のガラス細工にも、左右の白い大きな柱にも足止めされることなく、つかつかと真つすぐ歩いていった。刳り貫かれたような形の入り口をくぐり、目的地へと向かって歩く。その足がだんだんと早くなつたが、自分を落ち着かせるように、一歩一歩確実に進んでいく。

白い部屋をいくつも通り過ぎ、やがて大きな扉に辿り着くと、女はためらうことなくその扉を開け放った。

扉の向こうには、白いローブを着た老人と、同じような格好の男性とがいた。若いほう

の男が、諫めるように声を張り上げる。

「何事だ、ファレイ＝ミラ……！ もう少し、落ち着いて行動できるのか」

「お言葉ですが、キリン＝ルーシ殿」

ファレイは、真つすぐキリンをにらみつけた。

「いま何が起こっているのかご存じないわけではないでしょう……その状況で、落ち着い

ていらつしやるあなたがたのほう信じられません」

「ファレイ……！ 貴様、赤の神官の分際で……！」

「黙りなさい」

キリンを手で制し、老人が座っていた椅子から立ち上がった。ファレイに歩み寄り、やさしい瞳で彼女を見下ろす。

「あなたのことわかります。しかし、落ち着きなさい、ファレイ……ミラ。あなたの

ように、心からセプテンを愛する神官がいることを嬉しく思います」

「ありがとうございます、ルーンセイグ老。光栄でございます」

深々と頭を下げたファレイを見て、ルーンセイグは微笑した。この一途さ、真つすくな

信仰心は、かけがえのないものだ。

「今回の事件は、誰に非があるというわけでもありません。そうです……これもまた、

なくてはならない出来事であり、必然であったのでしよう。何事にも無の意味はない……

セプテンの教えです」

「……はい」

頭を垂れたままで、ファレイがうなづく。わかっているはずのことであったが、その言葉は初めて聞かされた教訓のように心に響いた。

顔を上げる。ルーンセイグの白い衣裳が目に残った。セプテンの神官のなかで、最も

位の高い白の神官のみが着ることを許されたものだ。横に、不機嫌そうに控えているキリ

ンもまた、白い衣裳を身にまとっている。

対して、ファレイは位の高くはない赤の神官だ。戦う役目を持つ神官が、このように呼ばれていた。

「ファレイ、何か用件があったのではないのか？」

「用件、というよりも……いてもたってもいられなくなり、お願いがあつて、参りました」

キリンに向き直り、ファレイは口を開いた。

「ここどころ、神殿は乱れております。奇跡の神子さまがご不在というだけでなく、さ

らには希望の象徴であるエスペランスがなくなってしまつとは……。しかも、エスペラン

スが盗まれた日、この神殿を見回っていたのは私でした。責任を取りたいのです」

「責任……そのようなものは誰にもないと、先ほどいったばかりです」

「ですが……！」

ルーンセイグは、息を吐きながら微笑した。

「エスペランスを持ち出したのは、フィエルテ・ドントワールに相違ないでしょう。責任を取りたいというならば、ファレイ、あなたにはフィエルテの追跡を命じます。赤の神官として、任務に就いてもらえますね？」

「はい、もちろんです！ ありがとうございます、ルーンセイグ老」

「礼をいわれることはありません。頼みましたよ」

ファレイは、もう一度深々と頭を下げた。それから、赤の神官として敬礼し、踵を返す。

颯爽とした後ろ姿が部屋から消えると、ルーンセイグは小さくため息を洩らした。

「真つすぐですね。あまりに真つすぐで、脆い」

「引け目を感じているのでしょうか。身体能力の高さを問われる赤の神官に、デインデ

イゴは少ないですからね」

キリンがこたえる。事実、基本身体能力に勝るビースルが赤の神

官になることが多く、
フアレイのような例は稀だった。

「いずれ、あの子も、わかるでしょう……」

ルーンセイグは、もう一度微笑む。心情の推し量れない、静かな
笑み。

「世界は、決して、真っすぐではない」

*

目覚めると、そこは暖かいベッドのなかだった。

「……………」

目を開いて、最初に見えたのは天井だった。ロゼはそのまま、動
かなかった。

「……………」

ひどく、ぼんやりとしていた。考えようという機能が働かない。
しかしやがて、ロゼの

脳が、動きだす。ここはどこなのか、自分は何をしているのか

見つめていた天井が見えなくなって、代わりに、大きな耳の少女
が視界に現れた。

「あ、起きた！ おはよう、ロゼ」

話しかけられて、ロゼの頭は急に覚醒する。

「ミーシャ。おはよう」

「へえ、『おはよう』って、知ってるのね。朝のあいさつ。ロゼっ
て、何が初めてで、何を知っているのか、よくわからないわ」

いわれて、ロゼも少し驚く。確かに、そのあいさつは何も考えず
に口からこぼれた。ずっと昔に、ロゼもまた、日常的に使っていた
のかもしれない。

「朝ごはん、できてるって。さっき、リィナさんが呼びにきてくれ
たのよ」

「うん」

ロゼはうなずいて、起き上がる。ベッドの隣に、水をはった容器が置いてあった。ロゼは自然に、それで顔を洗い、隣にあった布で拭う。

感心したようにそれを見て、ミーシャはふうんと鼻を鳴らした。

「それも、習慣だったみたいね。不思議。きっと、ニンゲンだった頃の記憶が、残っているのね」

いいながら、ロゼの大きな帽子を取って手渡す。それを受け取って、ロゼは曖昧な笑みを返した。そうはいわれても、自分には何が何だかわからない。

準備ができたのを見て、ミーシャは笑顔で右手を差し出した。手をつなごうというのだ。

深く考えずに、ロゼはその手をつかむ。

ミーシャはくすぐったそうに笑った。そのままロゼをひっぱり、部屋を出ると、階段を駆け降りた。

「あ、ロゼさんも起きたんですね。お早ようございます」

ちょうど階段の下をとおりかかった、三つ編みの少女が、やわらかく微笑む。大きな瞳の、可愛らしい少女だ。

「お早よう、ございます」

少し気後れしたように、ロゼが応える。昨晚のことはあまりよく覚えていないが、確かリイナという名の娘だ。

「ご飯、できてますよ。奥のテーブルに用意してあります。ごゆっくり、どうぞ」

「ありがとうございます」

楽しそうに、ミーシャがぺこりと頭を下げる。テーブルには、ホットサンドと野菜スープ

プ、そしてフルーツジュースが用意されていた。

「わあ、いいにおい！」

「お腹すいてなかったけど……見ると食べたくなるね」

「すいてなかったの？ わたしはもうぺこぺこよ！」

そして二人がテーブルにつく。豪華とはいい難かったが、あたたかい、家庭の味のある料理だ。二人は、あつという間にそれを食べ終えた。

「おはようございます、ロゼさん、ミーシャさん。あなたたちは運がいいわ、とてもいい天気ですよ」

食後に、温かい紅茶を持って現れ、年老いたディンディゴの女性がやわらかく笑った。マリアンという名の、この宿の主人だ。背中を丸め、ゆっくりとした動作で二人に紅茶を注ぐ。

「おはようございます、マリアンさん。昨日は、どうもすみませんでした……あんな遅い時間に、押しかけてしまって」

「あらあら、そんなこと。いいんですよ、ゆっくりしていただくさい。これも何かの縁でしょう。よかったら、うちのリイナが町をご案内しますよ」

そういわれて、ミーシャは微笑む。それも、いいかもしれない。

マリアンは、ふと気がついたように、丸い眼鏡を右手で支えながら、まじまじとロゼを見た。小さく声をもらし、何度も目を瞬かせ

る。「これは……昨日は気づかなかったけど……あらあら、私ったら、勘違いをしましていたみたい。いえね、もう目もほとんど、見えないものですから。ディンディゴとビール以外のヒトにお会いするのは、何年振りでしょうかねえ」

しみじみと、何かを思い出すようにつぶやく。ロゼは首を傾げ、ミーシャは思わずびくりと動揺した。

その横を通りかかった孫娘のリイナが、笑いながらマリアンの肩をたたいた。

「もう、おばあちゃんったら。何わけのわからないこといつてるの。ごめんなさいね、時々、変なこといい出すんですよ、うちのおばあちゃん」

「ああ、いえ……」

ミーシャが曖昧に笑う。それを見て、ロゼもとりあえず笑ってみた。

「お二人とも、今日は本当にいい天気ですよ。リリン・ドゥーアへ向かわれるそうですね……せつかくですから、観光なさってはどうですか？ このリイナでよければ、ご案内しますよ！」

「そうですね、うん、二人で、散歩してみます。どうもありがとうございます」

このままここには、何か気づかれてしまう気がして怖かったので、ミーシャはそういつてそそくさと席を立った。

エーダの町の中央広場では、相変わらずたくさんの方が行き交っていた。しかし、昨日のように演説をしているものはいない。路上に広げた店で呼び込みをするもの、買い物をするもの、待ち合わせをしているらしきもの……たくさんの人がいきいきとした姿でそこにいるのを見て、ミーシャは胸が高揚していくのを感じた。

町は、こういうものでなくてはいけない。自分が生まれ育った町を思い出し、彼女はそれを打ち消すように首を左右に振った。

「綺麗だね。噴水が、ちかちかしている。まぶしい」

ロゼが、目を細めてつぶやいた。広場の中央にある大きな噴水が、朝の光を反射して、輝いているのだ。ミーシャは、少し笑った。

「ドールでいたときには、こういうの、見ることができなかったのよ、ロゼ。綺麗でしょう？ どんな気持ち？」

ロゼの手を握っているミーシャには、改めて尋ねるまでもなく、彼の気持ちは流れ込んできていた。それでも聞きたくて、ミーシャはロゼの顔を覗き込む。

「んー……なんていうか……すごい、ね。おっきい」

「おっきい？ 変なロゼ！」

声を出して、ミーシャが笑う。いまロゼが感じているのは、とても容易にいい表せる気持ちではなかった。大きな感動と、わずかな

困惑、そしてほんの少しの畏怖。

「ねえ、いいにおいがするわ！ あ、ほら、何か売っているみたい」

「甘いにおい。なんだろう」

尻尾を揺らし、ミーシャはロゼを噴水の横のベンチに座らせた。

「ちよつと待ってて！ きつと、クリームのお菓子だわ。買ってくるから！」

返事も待たずに、ピースルらしい身軽さで走っていく。何かをいおうとして口を開いたときには、ミーシャはもう随分遠くに行ってしまうっていて、ロゼはそのまま口を閉じた。

片手で帽子を押さえて、噴水を見上げる。まぶしい。

彼には、目を覚ました後に見たものすべてが、まぶしかった。

「……ドールでいたときには、見ることでできなかったもの……」
つぶやく。では、いまの自分はなんなのだろう。

「ドール……ニンゲンのなれの果て……じゃあ、ぼくはニンゲンに戻ったのかな。それとも、ドールなのかな。それとも……」

ロゼは振り返った。たくさんのデインディゴとピースルがいた。

自分は、彼らとは違うのだろうか。何が違うのだろうか。

どうして、目を、覚ましたのだろうか。

「……？」

視線を感じて、ロゼははっと息を飲んだ。嫌な気配だ。

「誰？」

思わず立ち上がる。ドールは、どんなヒトよりも優れているように「造られて」いる。集中すれば、鋭い視線が自分に向けられているということも、それが誰のものであるのかということも、すぐにわかった。

痩せた、デインディゴの男だ。彼はひどくうつろな目で、じつとこちらを見ていた。

「……何？」

誰にも聞こえないような小さな声で、ロゼはつぶやいた。男の目は、だんだんと意志を持つかのように光を帯び、やがて驚きの表情

となった。

「……どうということだ……」

男が声を絞り出す。ロゼの視界の中で、行き交う人々の姿は遠くなり、男の姿だけが浮き上がったようだった。

「……どうということだ、貴様、なぜ動いている……？」

「ぼくを、知っているの？」

大きく目を見開いたままで、男はゆっくりと近づいてきた。ロゼの目の前まで来て、その姿を凝視する。

「知っているさ……貴様の顔は見たことがある……それにその格好だ、間違いない……どうして、貴様が、動いているんだ……？」

「そんなこと、ぼくにも……」

「貴様ではないのだ！ 何故だ、何故こんなことに……！」

突然の大声に、ロゼがびくりと身を震わせる。男はロゼの両肩を思い切りつかんだ。

「わかったぞ……腕輪だ……そうだな？ 返せ、それはオレのものだ、返せ！」

男の指が肩に食い込んだ。ロゼは顔をしかめて、その手を振り払う。

「何をいつているのかわからない。あなたは誰？ 腕輪って何？」

「わからないだと？ ふざけるな！ ならばどうして、貴様が動いている？」

「わからないって、いつているのに……！」

ロゼは、男の手を力任せにねじ上げた。男が苦痛に顔をゆがめる。

「ロゼ！ どうしたの！」

ミーシャが駆け寄ってきて、ロゼの手を掴む。意識が流れ込み、ミーシャは男をにらみつけた。

「なんなの、あなた？ ……？ あなた、神殿の……」

「おまえ つ、奇跡の神子だと？ ……くそつ、ふざけてやがるつ」

男は鋭く舌打ちした。意外な身軽さで翻り、噴水の反対側へと走

り出す。

「……出直した、必ず、取り返してやる……！」

一人つぶやき、そうして姿を消した。

残された二人が、呆然と、顔を見合す。

「……なんだったんだろう」

「あの人、見たことある。神殿で働いていたはずよ。何をされたの？」

ロゼは小さく息をつき、すんと腰をおろした。首をかしげるようにして、ミーシャを見上げる。

「腕輪を返せ、どうしておまえが動いているんだ……そんなことをいつてた。ぼくが、ドールだったことを、知っているみたいだったよ」

ミーシャが眉をひそめる。

「……まさか、腕輪って……」

続く言葉を飲み込んで、ミーシャはゆっくりと首を左右に振った。

2

「腕輪？」

白い髭を触りながら、片眼鏡をかけた老人は、赤い髪的美女を見上げた。

「見りゃあ、わかるでしょうよ。お客さんの後に並んでるだけでも十数個だ」

「そういうことでは、なくて……」

フレイミラは、カウンターに身を乗り出した。

「私が搜しているのは、銀の装飾の……少し、骨董めいたものです。こつ、三日月形になっていて……」

「骨董ねえ……ないよ、そんなものは。お客さんのいうように、たとえ誰かが持つてきても、買い取らないね。骨董ほどあやふやなものはない。うちの店は、歴史を信じない方針でね」

ファレイは、眉を跳ね上げた。怒りがこみあげたが、気を沈ませ、押し殺すように礼を口にする。そうして店を出て、大きく深呼吸した。

これで、このエーダの店はすべてまわった。予想していたことだが、やはり、売られてはいないらしい。

「この町に入ったことは、確かだが……」

しかし、人を捜すにも、物を捜すにも、一筋縄ではいかない大きな町だ。気を取り直すように顔を上げて、眩しいばかりに水を散らす噴水を見つめる。

今は、それを美しいと思うほど、心に余裕がなかった。ファレイは、足早に歩きだした。

薄い生地にクリームと果物を包み込んだ菓子を頬張り、ロゼは思わず言葉を失った。一瞬だけ動きを止めて、それから一気にたいらげる。

その様子を見て、ミーシャは小さく笑ったが、言葉を発するわけではなく、そのまま俯いてしまった。

「どうかしたの？」

ロゼが問いかける。少しだけ遠慮がちな声だ。返事がないので、ミーシャの顔を覗き込むと、ひどく深刻な顔をしていた。二人が座るベンチの前で、噴水が相変わらず見事な水芸を披露しているが、今は二人の目に映らない。

敷き詰められた石の囲いが、水を浴びて微かに輝いている。それを照らす陽は、もう高いところにあつた。

「……結局、外に出ると、こうなるのね」

ミーシャが、呟いた。意味はわからなかったが、ロゼは何となく悲しくなる。

「あの人が、正しかったのかな。それだけは、認めたくないけど、そうなのかな。……ねえ、ロゼ」

ロゼはこたえない。ただ、ミーシャを見ている。

「わたし、もうセプテンとは関わらないつもりだったんだけどなあ。無理なのかなあ。きつと、セプテンに呪われてるんだわ」

「……セプテン……町？ それとも、神殿？ 嫌いなもの？」

「セプテンと名のつくものは、全部嫌い」

そういつて、ミーシャは笑った。こういうこというから呪われるのよ、といつて、おかしそうに 少しでも自嘲を含ませて、笑う。

「ねえ、ロゼ。さっきの人に、腕輪を返せっていわれたのよね？」

心当たりはある？」

いわれて、ロゼは、両手の長い袖をまくってみせた。

「ぼくは、腕輪なんてしていないよ。持ってもいない。どうしてもぼくが持っていると思っただのか、まったくわからないよ」

「そうよね……なんだったんだろう」

つぶやきながら、ミーシャは考える。もしも、エスペランスが盗まれたという噂が本当で、それを探しに神殿のものが動いているのだとすれば、彼がそうなのだろうか。

「……ロゼを見て、一目でドールだってわかるなんて、どういうことかしら」

「何を、考え込んでいるの？」

純粹に不思議そうに、ロゼがミーシャを見つめている。少し笑って息をつき、ミーシャは立ち上がった。

「なんでもない！ さ、せっかくだから、この町のいろんなところを見て回しましょう。」

まだ旅は始まったばかりだもの。こんな出発点で、ぐずぐずしてられないわ」

明るい笑顔だ。耳と尻尾を揺らし、まだ座っているロゼへと手を差し伸べる。

その手を握る前に、ロゼは、昨日から抱いていた疑問を口にした。「リリン・ドゥーアっていうところへ、行くの？」

ミーシャは、瞳をゆっくりと瞬かせた。

「ああ、そっか、昨日話したんだっけ……。最終的な目的地は、そ

のつもりよ。どうしても、行きたいの。ロゼにとっても、意味のある場所だと思う」

ふうん、とロゼが小さく声を発する。そして、今度は手を握り、もう一つだけ質問した。

「そこには、何があるの？」

「難しい質問ね……たぶん、なにもない」

ミーシャは、少し淋しそうに笑い、こうつけ加えた。

「でもひよっとしたら、ニンゲンが一人」

空が赤く染まるころ、二人は宿へ帰りついた。数えきれないほどの店をまわり、町の図書館を見て、それから博物館を出るころには、空の明るさはその色を変化させるところだった。見た店の数のわりには小さな荷物を抱えて、ミーシャが木製の扉を開ける。買ったものといえば、保存食と、火種ぐらいた。

「おかえりなさい、ロゼさん、ミーシャさん」

カウンターで、リイナがにこやかに二人を迎えた。

「エーダの町は、どうでしたか？」

「とつても、素敵だった！ たくさんお店があるのね。全部行きかけたのに、半分も行けなかったんじゃないかな」

「そんな、一日じゃ無理ですよ！」

残念そうなミーシャに、リイナは笑う。エーダは大きな町だ。一日どころか丸三日あっても、すべてを見ることは不可能だろう。資料館や名所なども見ようと思えば、なおさらだ。

「夕食の準備、もうちょっとかかるんです。お呼びしますから、それまで……」

「うん、部屋で休もうかな。ありがとう」

やさしく笑って、ミーシャが階段を上っていく。それまで黙っていたロゼは、リイナにむかってペコリとお辞儀し、あとに続いた。

部屋に入り、ミーシャはソファに深く座り込んだ。無言だ。ロゼは、ミーシャを見下ろした。

「どうしてそんなに、無理をするの？」

少し間を置いて、ミーシャが顔を上げる。

「なにが？」

にこやかな、やさしい笑顔で逆に問いかけられ、ロゼは首を左右に振った。

「ほら、そうやって、また無理をする。ミーシャ、ぼくはミーシャみたいに、人の心の声が聞こえるわけじゃないけど……それでも、ミーシャの心、少しはわかるよ」

ミーシャの表情が、笑顔のまま固まった。ロゼはしゃがみこみ、俯いてしまったミーシャを見上げる。

「疲れていないわけがない……いつも笑っていられるわけがない。

ヒトのそういうところが、ぼくにはわからない。ミーシャの笑顔は、アリアさんたちと同じだ」

「アリア……さん？ あんな人と一緒にしないで」

「でも一緒だよ」

きっぱりと、ロゼはいきった。

「何かを我慢して、笑って、それで自分を誤魔化せている気になっている。それじゃあ、何も、変わらないのに」

「……だって……！ だって、わたし……！」

ミーシャの声が大きくなり、それから重い沈黙が訪れた。押し殺した声で、ミーシャはもう一度、口を開く。

「……考えが足りなかったのね。自業自得。セプテンの外の世界は、素晴らしいところなのだと思うた。もちろん、旅なんて大変だつてわかっていても……ちっとも、わかってなかった。それに、結局、セプテンからも離れられない……」

「……」

ミーシャは、自嘲気味に、笑った。

「わたしね、あなたが動きだしたとき、本当に嬉しかったの。世界がわたしの味方をしてくれているような気になったわ。あなたと一緒になら、なんでもできる気がした。あなたに世界を見せたいという

のは本当だけど……つまり、一人じゃ嫌だったのよ。……でも結局、あなたを道連れにしただけね。ごめんね、ロゼ」
「ぼくは、感謝しているよ」

ロゼは、ミーシャの両手を優しく握った。その気持ち、ミーシャのなかに流れこむ。ミーシャは目を閉じた。

「あなたみたいなお人のこと、お人好しっていうのよ。……ありがとう、ロゼ」

ミーシャも、その手を握り返す。

静かな沈黙が落ちた。

「……？」

不意に、ミーシャが顔を上げた。大きな耳を動かし、鋭く辺りをうかがう。

「……どうしたの？」

「……しっ！ 何か、近づいてくる……」

ロゼも、静かに耳を澄ます。ややあつて、微かな風の音が、聞こえてきた。ロゼが素早く窓を見る。ミーシャはすでに、扉と反対側にある大きな窓に近づき、外を睨みつけていた。

「鳥だわ……！」

「ごうつと風がうなり、ほぼ同時に窓ガラスの割れる音が響き渡った。黒い大きな鳥が数羽、窓を破って部屋に飛び込んできた。

「きゃあっ」

「ミーシャ！ 下がって！」

とてつもない羽音と、ぎゃあぎゃあという鳴き声。頭を抱えて身を屈ませたミーシャを庇い、ロゼが鳥を睨みつける。

「なんだ……？ 目が、光ってる……鳥に似てるけど……」

「セプテンの黒鳥だわ！ どうして……」

「……うわっ！」

一羽が二人目がけて一気に滑空し、ロゼは咄嗟にそれを手で払い除けた。想像よりも重い感触を残し、黒鳥は空中でよろめく。

部屋の中を飛び回っていた数羽の鳥が、やがて部屋の中央あたり

に集まった。目を怪しく光らせ、まるで二人に襲いかかる機会を窺っているようだ。

ミーシャを後にかばい、ロゼはじりじりとあとずさる。

「こういう場合、普通、ヒトはどうするの？」

冗談のつもりか、緊張感のない問いを後に投げかける。ミーシャは引きつった笑みを浮かべ至極真面目にこたえた。

「ヒトそれそれだけど、逃げるのが普通ね……可能なら、だけど」

「不可能だ」

「そう思う」

沈黙が訪れる。

ざわりと、黒鳥の間に風が走った。そのすべてが、一斉に、翼を一際大きく広げる。

「くるわ！」

ミーシャが目を閉じ、ロゼは真つすぐに黒鳥を睨みつける。その時、割れた窓から、もう一人の客が降り立った。

「助けてー、とか叫んでくれりゃ、やりがいもあるのによ！」

二人と同じか、それより少し上ぐらいの、少年だった。耳は丸い。栗色の、後で束ねた長めの髪を揺らし、手にした鞭で黒鳥を叩き落とす。

およそ三回。その動きだけで、少年はすべての黒鳥を床にたたき落とした。ひゅっと鞭を振り、器用にまるめて腰のベルトに引っかけ。

二人は、声も出さず、突然の来客を呆然と見つめた。あまりに唐突で、何が起こったのかよくわからない。

「……あ、あなたは？」

「こんにちは、初めまして。なあに、通りすがりの正義の味方だよ」少年は、ぶかぶかの上着の袖をつかんで、まるで貴族の少女のように一礼した。つかつかと二人に歩み寄り、ロゼと、それからミーシャを見る。

「危ないところだったから、助けてみたんだよ。何か襲われる心当

たりは？」

「ないわ」

きつぱりと、ミーシャがこたえる。もちろん、ないわけがない。少年はとぼけた様子で、肩をすくめた。

「そりやまた、物騒な世の中になったもんだね」

「……助けてくれて、ありがとう」

礼を口にしたのは、ロゼだった。頭を下げ、自分より少し背の高い少年を見る。

「通りすがりなわけがないよね？　ぼくは君を、この街で何度か見かけたよ。ぼくのすぐ近くで。まるで、見張っているみたいだった」
少年は、かるく眉を上げた。

「……こりや、驚いたね。気づいてるんなら気づいてる素振りでもしてくれれば、こっちも対応のしようがあったんだけど」

「そうなの？」

ミーシャが、後からロゼの服の袖をひっぱる。触れているので、思いは伝わっているはずだが、聞かずにはおれなかったようだ。ロゼは、そうだよと答えた。

「気づいたのは、街に入ったとき。それからも、何度か見た」

「ふむ……それはそれは。隠れ損だね。でも、説明はあとで」

控えめなノックが、響いた。ミーシャは、はっと顔を強ばらせる。そして、そこから顔をのぞかせたリイナを見て、安堵した。

「……あの……何か、あつたんですか……？」

おずおずと、話しかけてくる。恐る恐る視線を泳がせて、床に転がる複数の鳥の死骸を発見し、悲鳴をあげた。

「こんにちは、お嬢さん。この宿に泊まりたいんだけど、部屋は空いています？」

突然の客と、鳥と、ロゼとミーシャと、割れた窓とを、困惑した様子で見て、リイナは力なく答える。

「……あ、空いて、ます……」

「そりやよかった。じゃあ、泊まらせてもらおうよ。期間は……」

少年は、にやりとした笑みを浮かべ、恭しく右手をのばすと、ロゼとミーシャの二人を示した。

「この二人と、同じでよろしく」

割れた窓から、冷たい風が吹き込んだ。ミーシャは驚いて口を開け、ロゼは不快そうに眉を曲げ、少年を見る。視線に気づいたのか、少年はさもおもしろそうに笑うと、ロゼの肩を馴々しくたたいた。

「ま、仲良くやっついていきましょう」

「……ええっ？」

数秒遅れて、ミーシャが、間の抜けた声をあげた。

「助けてくれて、ありがとう」

リイナとともに部屋のなかを片づけ、それでも悪臭がするからと他の部屋に移り、そこでやっとミーシャはお礼の言葉を口にした。

その後が続いて、ありがとう、とロゼもつぶやく。

少年は、片手を振りながら、はいはいと答えた。

「お礼はいいよ。目の前で襲われてるのに、黙って見てるわけにもいかないし」

「あなたが助けてくれなかったら、どうなっていたかわからない」
無表情で、ロゼがいう。しかしその目には、油断のない光があった。

それに気づかないふりをして、少年はとぼけた様子で笑ってみせる。

「自己紹介をしたところか　俺はアスフェル。見てのとおり、ディンディゴだ。一人ですつと、旅をしている」

「旅を？」

ミーシャは思わず声をあげた。自分たちとそう歳が変わらないように見えるのに、と考えてしまう。きっと自分では想像もできないような生き方をしてきたのだろう。

「旅が、珍しい？　でもそっちも、旅をしてるみたいだけど？」

「それは、質問？　知っているくせに、聞くの？」

ゆつくりと、感情のない声でロゼが問いを発した。ミーシャが、驚いて隣を見る。

「回り道は嫌いって感じだね……でも、その質問は難しいね。深く考えて聞いたわけじゃない」

「……………」

ロゼは目をそらさない。ミーシャも、アスフェルと名乗った少年の方に視線を移した。

彼は、肩をすくめた。

「よしわかった！ ちゃんと、説明しよう。俺はこの町の入り口で、あんたら二人を見かけた。そして興味をもった。なぜなら 俺は、白い町に行ったことがあるからだ」

ミーシャは息を飲んだ。白い町　ロゼたち、ドールがいた町のことだ。

「じゃあ……………」

「ご名答。一目でわかったよ、ドールだってね。だから、興味をもったんだ」

驚いているミーシャの横で、ロゼがゆつくりと目を瞬かせる。

「……………」

「あなたが、いた町のことよ……真つ白な家が並ぶ町。覚えてるでしょう？」

ロゼはうなずいた。それなら、覚えている。おそらく、自分にとっては故郷と呼べる場所だ。

「その家のなかには、ちょうどあんたみたいなの　大きな帽子をかぶって、変わった服を着た奴らがいっぱいいた。見たことがある奴ならすぐわかるよ。あんた、ドールだろ？」

正直にうなずく前に、ロゼはミーシャの顔をうかがってみる。彼女は俯いてしまっていて、その表情はわからなかった。

「……………」

「な？ ほら、やっぱりな！」

アスフェルはおもしろそうに笑った。

「俺は、まあ自分でいうのもなんだけど、ドールにはちょっと詳しい。でもさすがに、動きだしたドールつてのを見るのは初めてだ。あんたの行く末に興味がある。どうやら、変なのに狙われてるみたいだな？ 護衛をする代わりに、あんたらにちょっとつき合わせてほしい。ま、ただのお願いだ、断ってくれてもいいけどね」

それならそれで、勝手についていっただけだしね 後半の言葉を、彼は飲み込む。

「……そんなの……」

俯いたままで、ミーシャは呻いた。信用できるわけがない。すぐに人を信用してはいかないということは、身をもって学習した。

しかしその隣で、ロゼは決意をしていた。
「わかった」

「？ ロゼ？」

ミーシャがロゼを見る。ロゼは、真つすぐに、挑戦的とさえ思える眼差しを、アスフェルに向けていた。

「お願い。ミーシャを、守って」

「……ロゼ？」

「同じだよ、ミーシャ」

ロゼはやさしい表情で、ミーシャを見た。

「どっちにしても、同じだよ。この人は、ぼくらについてくる。だったら、目に見えるところにおいてくれたほうが、いいよね？」

「う、うん……」

釈然としないままに、ミーシャはうなずく。まるですべてわかっているようないい方だ。

ロゼの言葉に、心のなかでアスフェルは笑った このドールは、頭がいい。

しかし、決定的に、わかっていないことがある。

「……よし！ わたし、あれこれ考えるのは好きじゃないの。そうと決まったからには、仲良くやったほうがいいわよね。わたしはミーシャ。ピースルのミーシャよ」

先程までとは打って変わった明るい声で、ミーシャが自己紹介をした。それから、とん、とロゼの肩をたたく。

「えと……ぼくは、ロゼ」

アスフェルは、目を瞬かせた。

「それだけかよ？　なんか他にないわけ？」

「何をいえばいいの？」

逆に問い返され、アスフェルは口ごもってしまう。そして、少しだけ考えて、問いを口にした。

「そうだ、ロゼ。あんたは、目覚めたドールだ。目覚めて、そうしてこの世界で、何がしたい？」

「え……？」

沈黙の後、ロゼは何だかおかしくなって、小さく笑みをこぼした。なぜ、そういうことを気にするのだろうか。まわりから見て「特別な自分が、「特別」ではなくなる儀式のように、当たり前であるはずの問いがロゼの前に降りる。

そう、そんなものは本来、取り立てて聞くようなものではない。

当たり前のものであるはずだ。ドールだろうと、ビースルだろうと、デインディゴだろうと、他のどんなヒトであろうと。

「そんなの、答えられないよ。答えられるような質問じゃない」

それは進歩だった。その言葉を聞いて、ミーシャははにかむように、少しだけ複雑な気持ちで微笑む。

一瞬驚きの顔を見せてから、そりゃそうだとアスフェルはうなずいた。

今こうして動いているヒトの間に、どれほどの違いがあるというのだろうか。

「じゃ、他に思いつかないから、質問はなし！　まあ、仲良くやっていきましょう。よろしく、ロゼ、ミーシャ」

勝手にそうしめくくって、アスフェルは立ち上がった。おやすみね、といい残し、音をたてずに　しかし見た目には騒がしく、部屋を出てしまう。

ぼつんと、二人が残った。

眠くなってきたのか、ミーシャの目が半分しか開いていない。いろいろあったので、疲れたのだろう。しかしその前に、そろそろ夕食ができている頃だ。

「ねえ、ミーシャ。あの黒い鳥は、何だったの？」

聞かれると思っていた。ミーシャは小さく息をつく。

「セプテンの黒鳥、だと思う。セプテンで、黒の神官として修業すると、ああやって動物を操ったり、呪術を使ったり……そういうことが、できるようになるの」

「呪術？　すごいんだね、セプテンって」

「すごくはないわ」

至極嫌そうに、ミーシャは答えた。

最後にもうひとつ、とロゼが質問をよこす。

「それが、どうしてぼくらを襲ったの？」

ミーシャは唇を噛んだ。

「心当たりがありすぎて、わかんない」

事実だった。

ロゼはうんとうなずいて、少し的の外れた言葉を返した。

「じゃあ、気にしてもしょうがないね」

慰めているつもりなのかもしれない。ミーシャは、笑った。

翌朝。

ロゼとミーシャと、昨夜加わったアスフェルの三人は、エーダの町を出発した。

宿を出るときに、リイナとマリアンから、保存食として鳥肉をたれに漬け込んだものを渡された。昨夜の黒鳥を、調理したらしい。素晴らしい商人根性だ。

「久しぶりのお客さんも、行っちゃったね、おばあちゃん」

食器をかたづけながら、リイナは食卓で本を読んでいる祖母に話しかけた。

マリアンは、目を細める。

「そうだねえ……でも、出会いと、再会があるから、この仕事はやめられないねえ」

「おばあちゃん、いいこという！ あたしも、このお仕事大好きだよ。でも、再会なんて、めったにないでしょ？」

「そうでもないさ」

マリアンは幸せな笑みを浮かべた。

「再会はあるよ」

もう自分は覚えていないとでも思ったのだろうか。ちっとも変わらない、ひねくれた笑顔でひよっこり現れたあの少年は。

「そうなんだ？ そっかあ、あたしはまだないや。いいなあ」

孫の声を聞きながら、マリアンは幸せな気持ちで、本に花のしおりを挿んだ。静かに閉じる。

大切なしおりだ。昔、まだ若い頃に、少年にもらった赤い花。

「あ、そうだ、おばあちゃん。あの……なんていったかしら？ そう、アスフェルさんが、お花をくれたのよ。おばあちゃんにとって、食卓に飾っていい？」

「もちろん」

そしてまた、昔のようにしおりを作ろう。

マリアンは目を細めて、懐かしそうに、赤い花を見つめた。

角張った白い家々が立ち並ぶ、無機質な空間。動いているものはないにもない、形だけの町。森を抜けると幻のように現れるその白い町は、シアにとっては少し苦手な場所だ。

彼女がこの町を訪れるのは、人生で三度目だった。猫のような耳は、力なく垂れてしまっている。彼女は尻尾を揺らし、自信のない素振りで辺りをうかがった。緩やかに編まれた長い三編みも、静かに揺れる。

相変わらず、何の気配もない。不気味なほどきれいに整った幅の広い道を、ゆっくりと歩いていく。

恐ろしく静かだった。風すらも動いていないかのようだ。森ではうるさいほどに聞こえてくる鳥のさえずりも、ここまではとどかない。

シアは、ぎくりとして立ち止まった。道の先に、老婆が立っていた。

「おやおや……これは、珍しいのに会ったもんだ」

老婆　　ヴィオレは、ひっひつと低く笑った。

「娘を探しにきたのかい、シア？」

シアは、一瞬躊躇したが、意を決したようにヴィオレに近づいていった。

「あの子が……ミーシャがどこにいるのか、ご存じなんですか？」

「ひっひつひつ。さあ、どうだかねえ。なんにしても、あんたのような親に、教えたくはないねえ」

おかしそうに笑う。シアはかっとして、大声を張り上げた。

「ミーシャを返して！ あの子、外になんか出たら、大変なことに

なるのよ……！ あの子は何もわかってないの！ 返してちょうだい！」

「ヴィオレは唇の端を上げ、大きく開いた目でシアを睨んだ。

「知らないね。あの子が出ていくのを見たが、どこにいるかなんて知らないよ。どうせあんたが、何か嫌われるようなことでもしたんだろうよ」

「……っ！」

「してない、といえば嘘になる。気づいていないわけではなかった。自分の行動がどれだけミーシャを傷つけているのか。」

「……後悔しているわ。でも私は、あの子のことを思って……」

「後悔？ やめときな。なんにもならないよ」

「笑みは絶やさずに、ヴィオレは厳しい言葉を吐き出した。うつむいたシアの目から、大粒の涙がぼろぼろとこぼれた。」

「……ミーシャ……どうして……」

「娘の名を呼ぶ。気味が悪いと思い続け、恐れてさえいる娘の名。」

「今までも、何度も後悔の涙を流した。ただ、その繰り返しだ。」

「あんた、親だろう。親がそんなふう泣いて、自分の不幸を慰めて、それでどうにかなるとでも思ってるのかい」

「あなたなんか……いわれたくないわ……この森に住みつく魔女なんか……！」

「あんたのそれは一生治らないね」

「笑いながら、シアの後を仰ぎ見る。そして、小さな二つの影を確認すると、息をついた。」

「あんたみたいなのから、どうしてミーシャやあの二人のような子どもが生まれたんだかね……」

「お母さん」

「それは、双子の少女だった。ふわふわの長い髪を、頭の高い位置で束ねている。まだ幼く、大きな目が愛らしい。」

「お母さん、泣いてるの？」

「ごめんなさい、ヴィオレお婆ちゃん。お母さん、疲れてるの。お

気を悪くなさらないでね」

少女たちは、ヴィオレにむかってぺこりと頭を下げた。時折、親の目を盗んで白い町に「冒険」に来ているので、ヴィオレとは面識がある。

「もちろん。気を悪くなんかしないさ。あんたたちのお母さんは、お気を悪くされたかもしれないがね。ひっひっひっ」

ヴィオレは身を翻した。黒い布をなびかせて、静かに歩いていく。後ろでは、まだシアの泣いている気配がした。

「あの子にとっては、良くも悪くも解放か……」
そして風に向かって、つぶやいた。

*

「あんたらはとんだ世間知らずだな」

二人の行き先を聞いて、アスフェルはひどく驚いた。こんな偶然があるなどと、思ってもみなかったからだ。しかし彼は平静を装い、怒ったように言葉を吐くことで、気持ちの乱れを誤魔化した。

ミーシャは腹が立つような恥ずかしいような気持ちになって、唇を曲げる。

「あなたが物知りすぎなのよ！ 若いのに、そんなんじゃすぐ禿げちゃうんだから」

「ミーシャ、それは偏見だと思うよ」

「ロゼまでこの人の味方するの？」

ミーシャが情けない声をあげる。ロゼの前ではお姉さんのような顔ができたのに、アスフェルの出現で立場が危うくなってしまった。まず、情報収集もろくにできないなら、地図ぐらい持つのは常識だね。それから、リリン・ドゥーアに行きたいなら、海路をとるルートの方が近道だ。あと……」

「もう！ わかったから、結局、何がしたいの？」

気持ちを隠したくて、大きな声をあげる。アスフェルはおかしそ

うに笑った。

「はいはい、悪かったよ。結局いいたいことは、今からでも近道があるってこと。ニンゲンがいた時代のカガクリヨクを駆使した素晴らしい方法だね」

「カガクリヨク？」

初めて聞いた単語に、ミーシャが怪訝そうな顔をする。

「ま、そのあたりのことはなんでもいいや。とにかく、めざすはトリコにあるセプテンの遺跡！」

そういうわけで、三人はトリコの町へと続く道を歩いていた。

右手には森が広がり、左手には茂みが続く。その茂みの向こうは絶壁になっていて、今ならまだ遠くにエーダの町を見下ろすことができるだろう。町を出てすぐに長い坂道を登り、やっと現れた平坦な道を歩き始めて、もうずいぶん経つ。

太陽も高い位置にきていた。春にさしかかったばかりとはいえ、太陽は張り切って大地を照らしている。

しばらく無言で歩いていたロゼが、突然小さく声をもらった。

「暑い……」

その隣で、ミーシャは耳を大きく揺らした。

「暑い？ ロゼも、暑いとか思うの？」

「思うよ。暑い。たぶん、この服、今の季節向きじゃないと思う……」

ミーシャはロゼを見た。深く考えたことはなかったが、たしかにぞろりとしたこの衣服は熱を放出するつくりにはなっていないようだ。

「嬢ちゃんはさ、ドールのことを完全に人形みたいなもんだと思ってるの？ そりゃヒトなんだから、暑いときは暑いつて思うだろ」
「たいして歳も変わらないように見えるのに、アスフェルはミーシャのことを嬢ちゃんと呼ぶ。気に食わなかったが、今はその内容の方が重要だった。」

「そう、よね……。ヒトなんだもん。当たり前だよ。でもなんか、不思議」

「やだよ。固定観念みたいなやつ、捨てたほうがいいよ」

「うん。反省する」

素直にそう思ったが、見るとアスフェルも充分暑そうな格好だ。結局そこは個人差なのかな、とミーシャの考えは一応の決着を見せる。

「何にも知らないみたいだから、教えてあげよう。ドールはニンゲンの成れの果てだって話は知ってるな？」

ロゼとミーシャはうなずいた。それは有名な話だ。ロゼは目覚めてすぐにヴィオレにいわれたので、知っている。

「そもそもずっと昔、この世界はニンゲンが支配していた。いまのディンディゴとかビースルとか、そういうのの元みたいな奴らもいたはいたけど、ニンゲンの数からすれば微々たるもんで、まあ森のなかとかそういうところずつましく暮らしてたわけだ。ニンゲンってのは、大部分が自然を支配しようって考えの奴らだった。独自の技術で暮らしをどんどん豊かにして行って、夢みたいな生活をしてたらしい」

簡単にいわれてもなかなか想像のつく話ではなかったが、二人は懸命に耳を傾けている。

ただずっと歩き続けているのに疲れたからというのもあったが、純粹に興味のある内容だ。

「でも、いくら自分たちの力でいい暮らしをしても、結局自然なしじゃやってけないってことになった。たとえばディンディゴなんかも自然を平気で壊すけど、そこはあくまで最低限、共存の範囲内だろ？　ところがニンゲンは止まることなく、上を上を求めて際限なくやつちやつたわけだ。で、いいかげん、なんとかしなきゃなつていう流れになつてきた」

それは、なんとなく想像できる気がした。話を聞く二人の表情が、少し固くなる。

「で、あるひとりのニンゲンが、進化をすればいいとかいいだした。進化をすれば、痛みを感じなくなる、腹も減らなくなる、考えなくてよくなる、死ぬことがなくなる……永遠の命を手に入れるんだってね。つまり、人形になるってことだ。もちろんそうすれば、自然なんて壊れるわけがない」

二人は、真剣な面持ちで、ただ黙って足を前に運び続けた。その続きは、聞かなくてもわかった。

「それで、ニンゲンはドールになったのね……」

納得できるような、できないような、不思議な感覚だ。少しは聞いたことがあったが、詳しく聞くのは初めてだ。

ロゼは、自分の歴史というよりは、まるで別の世界のお伽話を聞いた気分だった。

「ニンゲンは皆、その進化に賛成したの？ だからぼくも、ドールなの？」

アスフェルは、少しだけ淋しそうに笑った。ただその表情は、後を歩く二人には見えなかったが。

「そんなわけないだろうね。もちろん、反対するやつらもいたんだろう。でもいま、実際に、動いているニンゲンはいなくて、動かないドールはたくさんいる。詳細はどうあれ、それが事実だ」

「……………」

ロゼは押し黙った。もし、賛成していなくてもドールになった者もいるのだとすれば、自分はそうであればいいと、漠然と思う。

「ニンゲンはいるわ」

ミーシャが、独り言のように呟いた。

「だってわたしはそのために、リリン・ドゥーアに行くんだもの」「ニンゲンを、探してるってこと？ なんでまた？」

思わず立ち止まり、アスフェルがこちらを見る。ミーシャは、極上の笑みを浮かべてみせた。

「ないしょ」

向こう側の見えない笑顔に、アスフェルは黙る。しかしそれは、

アスフェルにとっても好都合だ。

「ニンゲンがいるっていうオハナシね……だから、リリン・ドゥーアか。なるほど」

「知っているの？」

「博識だからね」

おどけて笑ってみせる。二人のやりとりを聞きながら、この二人は仲が良くないのかなとロゼは思った。お互いヴェールごしに話をしているみたいだ。

話しながらも進んでいた道は、だんだん森のなかへと入っていき、暑さも和らいできていた。道は狭くなったり広くなったりを繰り返している。自分の暮らしてきた森と似ているなど、ふとミーシャは思う。

「ちよつと、休憩するか？ お疲れ？」

「まだまだ平気だけど。ロゼや、ディンディゴのあなたにはつらいかな？ 休もうか」

ドールはどうかかわからないが、少なくともディンディゴは頭脳派で、体を使うことには適さないとされている。ピースルの彼女は実際まだぴんぴんしていたが、先も長いので休憩することにした。

大きな木を探し、その影に座り込む。そして、リイナにもらった鳥の煮つけを取り出した。

「アスフェルは、ドールを、たくさん見てきたの？」

遠くを眺めながら、ロゼがそう口にした。

「……まあね。ドールの町ってのは、いろんなところにあるから慎重に、言葉を選ぶ。」

茶の用意をしていたミーシャが手を止めて、黙ってしまったロゼを見た。

「どうしたの？」

「何も」

「……………」

そして沈黙が落ちる。

ロゼは、考えていた。自分は何者なのか。

赤い髪を無造作に後ろに払い、ファレイは道を歩いていた。フィエルテッドントワールが町を出たことを知り、門番のいう方向へと急ぐ。この先にあるのはトリコの町。おそらく、そこへ向かったのだろう。

腕輪も、見つからなかった。ということは、売ったわけではないようだ。

「早く、見つけなければ……！」

焦りが、じりじりとつのる。

身軽さを重視したため、手足はほとんど露出していたが、それでもこの太陽の熱は暑いと感じた。雨が降るのか、湿度さえある。

行く先に、気配を感じた。ファレイは立ち止まり、少し離れた木の影から様子をうかがう。

子どもが、三人。ひとりは少女、あとふたりは少年だ。

「ピースルと、ディンディゴか……。子どもだけで、どうしてこんなところに」

何か、話しているようだ。気配を完全に殺し、もう少し、近づぐ。不意に、大きな帽子をかぶった少年が、こちらを向いた。

「どうしたの、ロゼ？」

少女の問う声。少年は、答えない。

ぶかぶかの上着を羽織った少年が、こちらを見もせず、いい放った。

「お客さんなら出てきたら？ 用がないなら失せることをおすすめするよ」

「……………」

ファレイは黙って姿を現した。

客というわけではないが、逃げ出すような真似をするいわれもない。

「失礼した。敵意はない」

彼女はそう告げ、今度ははつきりと三人の姿を見た。そして、絶句した。

「っ！」

現れた赤い髪的女性を見て、ミーシャはとっさに木の後ろに隠れた。

「ミーシャ？」

「しっ、黙って……」

ロゼの手を握り締める。ロゼからは、困惑と、それから案ずる気持ちなが流れてきた。

「あんた誰？ なに見てんの？」

その二人をかばうようにして、アスフェルがファレイの正面に立った。右手は、腰の鞭に置かれている。

しかし、ファレイはアスフェルを見てはいなかった。その向こう側、ロゼよりもさらに後ろを、呆然と見つめている。目は大きく見開かれ、驚きのあまり声も出ないといった様子だ。

「……？ おい、あんた……」

「ミーシャさまでは、ありませんか？」

唐突に、ファレイが口を開いた。びくりと、怯えたような震えが右手から伝わり、ロゼはファレイを睨みつける。

「ミーシャさま、ミーシャさまですね？ なぜ隠れるのです、ファレイ＝ミラです！ おわかりになりませんか？」

無然とした顔で、ミーシャがロゼの隣に出る。隠れても無駄だと悟ったのだ。

「わかったから、隠れたの。何の用？」

冷たい目で、ミーシャがいった。ファレイはゆっくりと首を左右に振る。

「なぜ、こんなところにいるのですか、ミーシャさま？ あなたがセプテンから姿を消してからというもの、神殿に訪れる信者もずいぶん減りました……」

「関係ないわ、そんなの。わたし、セプテンの信者じゃないもの」

「また、そんなことを……」

沈痛な顔をして、ファレイが黙ってしまふ。ミーシャもこの場に居づらそうに、下唇を噛んでうつむいてしまった。

アスフェルが、ロゼを見た。ロゼは相変わらずファレイを睨んでいる。

「……まあ、敵意がないってことはわかった。で、結局あんたは何なんだ？」

少し疲れたように、アスフェルはそう問いを投げかけた。

ファレイは、そんな彼らに向かって頭を下げる。

「失礼しました。私は、ファレイ＝ミラ。セプテンの、赤の神官です」

「セプテン……」

ロゼがつぶやく。また、セプテンだ。もう何度も、その名を聞いた。

「今は、ある任務でフィエルテ＝ドントワールという男を追っています。……だから、ミーシャさま、あなたを追ってきたのでは、ありません」

「……でも、連れ戻す気なんでしょう」

「……………」

赤髪の神官は、目を細めて少女たちを見た。そして、ゆっくりと首を振る。

「いいえ……戻っていただきたいが……むりやり、連れ戻すような真似はいたしません。私は、ミーシャさまの味方でありたい」

その言葉に、ロゼが緊張を解いた。ミーシャも、表情は硬いままだったが、どこかほっとしたように息をつく。

「あのさ、わかってないのは俺だけかもしれないけど。なんで『ミーシャさま』？ 嬢ちゃん、神殿の関係だったの？ 実は偉い人？」

無遠慮なアスフェルの言葉に、ミーシャの表情はさらに強ばった。ロゼと、ファレイにまで睨まれ、少しひるむ。

「な、なんだよ、なんかまずいこといった？」

「ミーシャは、嫌がってる」

「……あー、みたいだね。悪かったよ」

アスフェルが肩をすくめる。しかし、それで終わるわけもなく、
フレイは彼に詰め寄った。

「奇跡の神子さまを、知らないっ？ 貴様、セプテンの信者では…

…！」

「ないよ。俺、神とか信じないもん」

「なんてことを……！」

ぶるぶると震え、フレイが腰の剣に手をかける。アスフェルは
慌てて後ずさった。

「おいおい、信者じゃなかったら切るわけ？ むちゃくちゃだな！」

「……ミーシャさまが、このようなものと行動をともにしていると
は……！」

フレイの言葉に、ミーシャは不快感を顔にため息を吐いた。
自分だって、セプテンの信者ではないといったばかりなのに、この
神官には伝わってないらしい。

「あのね、アスフェル。……教えてあげる。わたしは、ヒトの考え
ていることがわかるっていう、この気味悪い力のせいで、幼い頃に
セプテン神殿に売られたの」

あきらめたように、ミーシャが口を開いた。

「それから、お祈りに来た何にも知らない信者の気持ちに
適当に
んで、それらしいこといって、お布施をいっぱいもらうって
いうお
仕事をしていたの。その評判が広まって、『奇跡の神子』とか呼
ばれたわ。そんなのに嫌気がさして、逃げ出したんだけどね。わか
った？」

すらすらと、よどみなく説明してみせる。ふうんと、たいして興
味もなさそうに、アスフェルは鼻をならした。フレイは、ミーシ
ヤのいい方に怒っているように見える。

ロゼの表情は、見えない。見るのは恐かった。

「ミーシャさまは、そのように、思っていたのですか……？」

「思つもなにも、そうなんだもん。違う?」
「違います!」

ミーシャには、自分のことを純粹に想ってくれているファレイの強い思いが聞こえてきた。意地悪ない方だったかもしれないと、自嘲気味に笑む。

「……相変わらず、ファレイは、真つすぐね。　　フィエルテッド
ントワールというひとを追っているんでしょう?」

恐らく、エーダの町で、ロゼに接触してきた人物だろう。名前をいわれば、一致しないこともない。しかし、彼がフィエルテだとすると、腕輪を返せという言動に疑問が生じる。

しかし、一連のできごとをわざわざ伝える気もなく、ミーシャはファレイを促した。

「こんなところで油を売ってる場合じゃないんじゃない?」

あつと、ファレイは小さく声をあげる。忘れていた。すぐに熱くなってしまうのは、悪い癖だ。

「……これは、重大な秘密なのですが……」

「エスペランス　　奇跡の腕輪が、盗まれたんでしょう?」

ファレイは、大きく目を見開いた。なぜそれを、といおうにも、驚きのあまり声が出ない。

「あ、それ聞いた。エーダの町で噂になってたな」

「うん。ぼくも、聞いたよ」

「……!　　そ、そんな……」

擦れた声で、つぶやく。このままでは、神殿の権威は失墜してしまう。

「と、とにかく、私は先を急ぎます。では、これで失礼を!」

ミーシャに向かって深く頭を下げ、ファレイは慌ただしく走り去っていった。その後ろ姿に、ミーシャは苦笑する。

アスフェルは、少しだけ楽しそうに口を開いた。

「奇跡の神子って、一年前ぐらいに失踪したっていう神殿の看板か……。噂には聞いたことあったけど、まさかあんたがそうだとはね」

「普通、このことを知ったら、信者以外は怯えるけど。アスフェルは平気なの？」

「俺は平気だよ」

アスフェルは、自分の胸をぽんつとたたいた。

「俺のここには、何も入ってないから」

冗談めかして笑う。

アスフェルらしいいい方だと、ミーシャも少しだけ笑みをこぼす。

「ロゼは、平気？」

一番気になっていたことを、できるだけ自然な流れで、問いかけた。答えはわかっていたが、言葉として、聞きたい。

「だって、ミーシャはミーシャだよ」

ロゼの言葉に、心底ほつとしたように、ミーシャは微笑んだ。

赤の神官、フアレイ＝ミラが走り去っていくのを、フィエルテ＝ドントワールは見ていた。自らの目で見ていたわけではない。黒鳥の目を通じて、距離をおいた森の中から、見ていたのだ。

「行ったか……」

トリコの町に行ったとでも、勘違いしているのだろう。好都合だ。こんなところで、捕まるわけにはいかない。まだ、目的は達成していない。

「あのドールから、腕輪を取り戻すまでは……ディアナを、目覚めさせるまでは……」

低い、地を這うような声で、つぶやく。ディアナ、ディアナと、最愛の妹の名を、フィエルテは何度も繰り返した。

黒の神官は、戦闘能力は低い。黒鳥などの動物を操ることができるとは、あと能力といえば精神に働きかけるものばかりだ。ドール相手に、精神への攻撃が効くとは思えない。力づくで腕輪を奪い取るうにも、あの腕のたつディンディゴの少年が護衛しているのでは、迂闊に手は出せなかった。

機会を待つしかない。

失敗は許されない。
すべては、ディアナのために。
フィエルテは、慎重に、尾行を続けた。

3

エーダの町からトリコの町へは、徒歩でちょうど七日間かった。たくさん買っておいた食料も、途中から足りなくなり、アスフェルが木の実などを調達した。旅慣れているだけあって、寝床の確保など、実にうまくやってのける。

ロゼとミーシャだけでは、こっちはいかなかっただろう。自分がどれだけ浅はかだったか、ミーシャは痛いほど思い知った。

もう、太陽は傾いていた。日中は暖かいが、太陽が隠れてしまうと、まだまだ肌寒い。

「ここが、トリコの町……」

眼前に広がる風景に、ミーシャがぼつりと呟いた。

「思ってたのと、違う」

「そりゃ、違うだろうね。文化が違う。ここに住んでるのは、ビールでもディンディゴでもない、スイースイーと、ストーンだ」

当然のことのように、アスフェルがいった。ミーシャは、ゆっくりと目を瞬かせる。スイースイーとストーンというのが、ヒトの種類であることはわかるが、目にするのは初めてだ。

トリコの町は、ミーシャの頭のなかにあるいわゆる「町」とは異なっていた。森、といった方が近い。道もなく、人工的に作られたようなものはほとんど目につかない。ただ、目の前に、「トリコ」と三種類の言語でかかれた看板があった。向こう側には、大きな木と、大小さまざまな石が見えるのみだ。

「スイースイー、ストーン？」

ロゼが、初めて聞いた言葉を繰り返す。

「あとで、教えるよ。とりあえず、ゆっくりしたいだろ？ 寝ると

「こ確保して……ああ、それと、なんか栄養あるもん食わないとな」
「町に入る審査とかは、いいのかしら……」

ミーシャは辺りを見回すが、杞憂だったようだ。そもそも、外壁といえるものも、枯れた草を組み合せて作られた柵があるのみで、外との境界はあつてないようなものだ。

「じゃあ、行こう。スイースイーと、ストーンというのに、会ってみたい」

珍しくロゼが自分からそんなことをいって、先頭を歩きだした。

木の前で、石を囲んで座り込んでいたこどもたちに話しかけると、すぐに宿の場所を教えてくれた。ひとりの少年に案内され、大きな木に辿り着く。

その木の前に、看板があつた。その看板の向こうに洞穴が見える。どうやら、この中に入っていくようだ。

「多くのスイースイーは、家を建てるって習慣がないんだ。森にある、こういうタイプの木の下に空洞を造って、そこで暮らす。自然との完全な共存が、スイースイーの美德だからね」

洞穴を見て、ためらった様子のミーシャに、アスフェルがそう説明した。ミーシャは、ゆっくりと首を左右に振る。

「わたしたちビースルだって、自然との共存をよしとしているけど、ここまではしないわ。というより……共存の考え方が違うのね、きつと」

ため息混じりに、感想をもらす。ひとそれぞれってやつだねなどと、アスフェルが簡単に相槌を打った。

「変なの。ぼくより、ミーシャの方が驚いてるみたい」

「だって、わたしの知らない世界なんだもの。あ、ロゼだって、そうよね……」

ロゼと目を合わせて、ミーシャは小さく笑う。

「わたしは、いろんなことを知っているつもりで、知らなかったからかな。だから、余計に驚いてるのかな……」

それがわかっただけでも、旅に出てよかった、そんなことを思いながら、ミーシャは少しだけ身を屈めて、洞穴に入る。

植物のようなものが発光し、ぼんやりと照らしているので、暗くはなかった。傾斜を進むと、髭をたくわえた細身の男性が、石と向かい合って座っていた。

彼はすぐにこちらに気づき、少しだけ驚いたように目を見開いた。「一昨日は勇ましいお嬢さんで、今日はかわいらしいごもさんか……こんな町に続けてお客さまとは、珍しい。ようこそ、トリコへ」男は、茶色の布に穴を開けて、頭からそのままかぶったような格好をしていた。首には、木の実で作られたペンダントが、じゃらじゃらといくつもついている。

好意的なその態度に、ミーシャはあわてて頭を下げた。それを見て、ロゼもかるく会釈する。

「こんにちは。あの……とりあえず、今日一日、泊まりたいんですが……」

控えめに、ミーシャの耳がゆれる。男は、もちろんとうなずいた。「どうぞ、ゆっくりしてってください。たいしたおもてなしはできませんが……私たちは、この町を訪れたあなたがたを、歓迎しますよ」

ミーシャは安心して胸を撫で下ろした。エーダの町ではほとんどの宿で断られたので、不安だったのだ。

「この宿の裏に、泉があります。水浴びをなさるといいでしょう。食事も、ご用意いたします。どうぞ、ごゆっくり」

宿の主人はそういって、やわらかく微笑んだ。

大きな部屋が布で仕切られ、ミーシャの部屋と、ロゼとアスフェルの部屋とが、簡単に作られた。部屋といっても、宿の主人が持ってきた草が寝床として敷かれただけで、特に何もなし。水を汲んできて身体を洗い、出された木の実や茸などの料理を食べ、三人はす

ぐに部屋に引っ込んだ。まだ、夜更けという程でもない。しかし、休めるときに休んでおきたかった。

トリコに辿り着くまでは、屋根のある場所で何も気にしないでゆっくり眠りたいとあんなに思っていたのに、何故か寝つけなかった。ミーシャは、何度も寝返りを打ち、天井を見つめた。

大きな木の根が、上から下へと伸びている。どういう仕組みなのか、土壁は崩れるような気配はない。

「……やっぱり、眠れない」

ミーシャは起き上がり、こつそり布をまくり、向こう側を見た。そこでは、アスフェルが、さつきまでのミーシャと同じように、天井を見ていた。

「ロゼは？」

「なんだよ、寝てたんじゃないのか」

アスフェルは、驚いてミーシャを見る。

「アスフェルこそ、寝てるんだと思った。ここにつくまで、夜も見張りしてくれてたみたいだから、ほとんど寝てないんじゃないの？」

「こつちが無理いつてついてきてんだ。当たり前だろ、それぐらいアスフェルのいい方では、考えていることがいまいわからぬとミーシャは思う。何かを強く思えば、触れていなくてもミーシャには聞こえてくるのだが、アスフェルの心はまだ聞こえたことがない。

「ロゼなら、ここのマスターにつかまってるよ。旅の話聞かせてくれって、さつきね。嬢ちゃんは寝てると思ったから、ロゼだけ行った」

「そっか……」

つまらなそうに、ミーシャが息をつく。どうせ寝つけないのだから、何か話しをしようと思ったのに。

「わたしも、行こうかな」

「……俺は、これからのことを思えば、寝といたほうがいいとは思うけど。ま、好きにすれば？」

ミーシャは、立ち上がるのは何となく億劫だったので、膝をついたままずるずると移動した。出入り口は、ロゼとアスフェルの部屋の方にあるのだ。辿り着いて、それから思い出したようにアスフェルに目を向ける。

「そういえば、あなたの胸の中には何も入ってないって、いつたけど。どういうこと？心、ないとか？」

「冗談めかして、話題を持ちかける。アスフェルは、あああれね、と笑った。

「別にそのままの意味だよ」

「じゃあ、わたしと、握手できる？」

微笑んで、右手を差し出す。触れれば、考えていることがわかるはずだ。

アスフェルは、挑戦的に笑って、その手を握った。

ミーシャの、表情が変わった。

「あなた……」

「な？ いったたる？」

「……っ」

ミーシャは急いで手を離した。怯えたように、アスフェルの目を見る。

「どうして……？ どういうこと？ こんなこと、今まで一度も……」

「……」

「ああ、やっぱり、そうなんだ」

アスフェルは、ひどく淋しそうに、唇の端を上げた。

夜は、綺麗だ。

朝も昼も、綺麗だけど。

初めて夜と出会ったような気分で、ロゼは、空を見上げていた。

「スイースイー……ストーン……」

視線を落とす。目の前に、ロゼの顔よりも少し大きいぐらいの石があった。この町に入って、いくつも見えた石だ。大きさは様々で、

その性格も様々なのだという。

「石じゃ、ないんだよね……」

ロゼは、先程宿の主人から聞いた話を思い出していた。この石のようなものは、「ヒト」なのだという。自分の力では動かないと思われているが、いつのまにか子孫を残す。気持ちによって、色や温度が変わるといふ。スイースイーとストーンは共生関係にあり、気候の変化に過敏なスイースイーは、ストンの湿り具合によって気候を「教えて」もらう。一方、ストーンは、それぞれの気候によってスイースイーに動かしてもらう。

そうやって、もうずっと昔から、助け合って生きているのだという。

大昔は、ストーンも一般的なヒトに近い形態をしていたのだそうだが、しかし、環境に適応していくうちに、今のようになつたらしい。「まるで、ニンゲンみたいだ」

ロゼは、目の前のストーンをそつと撫でた。

「ねえ、君はいま、何を考えてる？　いま、そうあることは、幸せ？」

言葉は、返ってこない。

ロゼには、少しずつ、わかってきている気がした。多分、同じなのだ。目を覚ます前、あの白い町にいた自分と。

「幸せとか……何を考えているとか……そういうことじゃ、ない……」

背後に、気配を感じた。

振り返ると両手を頭の後ろで組んで、つまらなそうにこちらを見るアスフェルがいた。

「夜が静かだって、最初にいった奴は誰だろうな」

「？」

突然、わけのわからないことをいう。

「実際、夜が静かだとか思ってる奴は、いっぱいいる。でも、静かなもんか。夜に活動する奴らが、こんなに騒いでる」

耳を澄ますまでもなかった。虫たちの鳴き声が響き、喧しいほどだ。

「夜に活動しない種類の奴らが、そう思うだけだ。そうだろ？」

「……うん。そうかも、しれない」

アスフェルはロゼを正面から見据えた。

「ドールが動かない人形だなんて、誰が決めた？」

「……そう……ミーシャたちにとっては、動いていなかったのかもしれないけど……」

ロゼは、ゆっくりと首を左右に振った。

「もしかして、もしかしたら……ぼくたちにとっては、それが当たり前で、ぼくたちにとっては『動いて』いて、きっと、幸せだったんじゃないかと……そんなふうに、思うときがある」

うまくいえないやと、ロゼは自嘲気味に笑う。

「どっちにしても、ぼくはもうこうなってしまうているから、わからないんだけどね」

それからロゼは、思い出したように、つけ加えた。

「それに、アスフェル。君も、動いているしね」

*

あんなに小さな町に入ってしまったえば、すぐにばれてしまうのは目に見えていた。フィエルテッドントワールは、ロゼたちがセプテンの遺跡に行くといっていたのを思い出し、遺跡に先回りしていた。

セプテンの遺跡といっても、遺跡らしいものをセプテンが買い取り、その後セプテンのものと認定しているだけなので、信者であるフィエルテも訪れるのは初めてだった。この他にも、セプテンの遺跡と呼ばれるものは全国に数多くある。建造物がしっかりとした形で残っているものなどは、そのまま教会として利用している例もある。

訪れたときにはほとんど陽も沈んでいたので、詳しいことはわか

らないが、随分と大きな、古い遺跡のようだ。あちらこちらが草木に支配されており、動物が住みついている気配もある。建物としての原型は止めておらず、しかしどうやら質のいい材質でできている壁は、崩れ落ちてもなお腐敗することなく残っている。

「やつら、こんな遺跡に一体なんの用だ……。ニンゲンがいた時代の何か、とっていたが……」

気にならないではなかったが、自分の目的に比べれば取るに足らないことだ。絶好の隠れ場所に身を潜め、飛ばした黒鳥での監視を続ける。

明日か、遅くとも明後日にはこの遺跡にやってくるだろう。それまでに、チャンスができるだろうか。できるだけ、早く、手に入れてしまいたい。

気持ちは急いていた。アスフェルは、血が滲むほど唇を噛み締める。

「こうしている間にも……ディアナはひとりで、淋しい思いをしているというのに……」

ひとり、呟く。

焦りだけがつのり、余裕を失ったフィエルテは、背後から忍び寄る気配に、気づかなかった。

思わぬ状況に、ファレイは緊張していた。トリコにフィエルテがないと知り、追いついてしまったのかと思い、遺跡で待ち伏せていたのだ。遺跡に潜伏して油断させておいて、町に現れたフィエルテを捕まえるつもりだった。それがまさか、遺跡に現れるとは。

フィエルテは、先程からずっとひとりで何か呟いている。ファレイは剣を鞘ごと構えると、背後からゆっくりと彼に近づいた。

そして剣を降りかぶり、フィエルテを殴りつけた。

「ぐあっ」

にぶい音がして、フィエルテはそのまま前方に倒れた。ファレイはすかさず縄で両手を縛る。

鞘の先で乱暴に転がし、上を向かせた。自分は立つたままで、鋭く睨みつける。

「フィエルテッドントワールだな？」

「……………」

フィエルテは、口から血を流していた。反抗的な目で、赤の神官を睨む。

「なんだ、その目は！ 貴様、セプテンの奇跡の象徴であるエスペランスを盗むということが、どういうことかわかっているな？ おとなしく、渡せ！ 今ならまだ、セプテン様はお許しになるかもしれない」

「……………噂の、赤の神官か……………」

恐れることもなく、フィエルテは嘲ら笑った。

「デインディゴのくせに戦う神官なんて、大変だろうな。なあ？ 知ってるか？ あんたが警備の日を選んで、盗みを決行したんだ。

デインディゴの、しかも女の赤の神官なんて、恐くもないからな」
かあつとファレイの頬が紅潮した。侮辱され、怒りで一瞬頭の中が真っ白になる。

「貴様……………！」

「それだよ。そういうところが、甘い」

いつのまにか二人を取り囲んでいた数匹の黒鳥が、一気にファレイに襲いかかった。ファレイは短く悲鳴をあげ、後ろに倒れる。

黒鳥は、ファレイの全身に鋭い歯を立てた。

「セプテンの黒鳥は、ヒトを喰う。知っているだろう。そのまま、こいつらの餌になれ」

「貴様……………！ 貴様は、それでもセプテンに仕える神官なのか？ エスペランスを、返せ！ このままでは、セプテンの権威は失墜してしまふのだぞ！」

「知ったようなことをいうな！」

自分でも聞いたことのないような激しい声で、フィエルテは怒鳴った。声に驚いたのか、操る力が途切れたのか、黒鳥が追い立てら

れるように一斉に飛び立つ。

しかしファレイは、すでに全身から血を流していた。

「セプテンは、オレの妹を救ってはくれなかった……。あの世で、救われているだと？ 最初は、それでもいいと思ったが……。やはりそんなもの、納得がいかない。あの世じゃ、だめなんだ。オレは、ディアナがいないとだめなんだ。ここに、この世界に、オレの目の前に！」

フィエルテは、ファレイを右足で踏み付けた。

「オレはもう、充分、セプテンに仕えた。褒美をもらって何が悪い？ 奇跡の腕輪、エスペランスで、奇跡を起こすんだ。その間、借りるだけだ。ディアナと、もう一度、暮らすだけだ。……。なあ！」
「ぐ……っ」

ファレイが血を吐いた。かまわずに、足に力を込める。

「あんたも、欲しいだろう。褒美が、欲しいだろう？ 神なんて、いたってな、救ってくれなきゃ、意味がないんだよ！」

足を振り上げ、頭を蹴りつける。赤の神官が動かなくなったことを確認して、フィエルテは彼女を持ち上げると、茂みに捨てた。

今の自分の計画に、必要のない存在だ。

「……妹と」

闇に飲み込まれそうになる。

フィエルテは、夜に向かって呟いた。

「妹と、暮らしたいと思うことの、何がいけない……。オレは、間違っただけだ。いい」

夜は嫌いだった。

恐ろしいほど静かで、自分も消えてしまう気がして、後ろを振り向いてしまいたくなる。

振り向いて平気でいられるほど、強くはなかった。

トリコの町に、朝が訪れた。

ミーシャが目を覚まし、部屋を出ようと仕切り布をまくると、そこにはロゼもアスフェルもいなかった。

「もう、起きたんだ」

両手をあげて伸びをして、ぷるぷると首と尻尾を振る。アスフェルがいないことに少しほっとしていた。

昨夜食事を出された部屋に行くと、そこではロゼが茶のようなものをすすっていた。ここにも、アスフェルの姿はない。

「おはよう、ミーシャ」

ロゼがこちらに気づき、嬉しそうに微笑みかける。ミーシャも笑っておはようと返し、ロゼの向かい側に腰をかけた。

「昨日は、よく眠れた、ロゼ？」

「うん。だから、今日はすごく気分がいいよ。ミーシャは？」

「……そうね。うん、わたしも」

本当は、ほとんど眠れなかった。

「ミーシャ？ どうかしたの？」

「ね、ロゼ、アスフェルは？」

できるだけいつもどおりに、何でもないことのように問いかける。

ロゼは、首を傾げた。

「さあ……ぼくが起きたときには、もういなかったけど。どうして？」

「……あのひと、おかしいわ」

「？」

ロゼは、目を瞬かせた。

「どういうこと？」

「おかしいの。変なの。ねえ、ロゼは、そう思わない？ 普通じゃないわよね？」

「……ミーシャ？」

ミーシャは押し黙った。おはようございますと声をかけながら、宿の主人が現れたからだ。

主人はミーシャの前に、暖かい茶を差しだした。

「申し訳ないのですが、この町のしきたりです、今日の朝食は、お出しすることができないんです。お茶ぐらいしか……」

ひどくすまなそうにいわれたその言葉に、ミーシャが敏感に反応する。

「しきたり、というの？」

「ロゼさんにはお話したのですが……昨夜おそくに、町のこどもがひとり命を落としました。そういうことがあったら、その次の食事はしれないというしきたりがあるんです」

今日の天気でも説明するような柔らかい表情で、主人はそう説明した。ミーシャは、何と聞いていいかわからず、思わず口を閉ざしてしまふ。

「では、どうぞ、ゆっくりなさってください」

「あ、はい……」

歩き去っていく主人を、思わず目で追ってしまう。なんとなく居心地の悪い気分で、ミーシャはロゼを見た。ロゼは、今までにないような複雑な表情をしていた。

「こどもでも、おとなでも、ヒトが死ぬのはよくあることなんだから。この町では、治療と呼ばれるものは一切しないみたいだよ。全部、自然に任せるんだって」

「……そうなんだ」

そういう考え方もあるのだろうと、認める気持ちもあつたが、やはりやりきれないような気持ちになつて、ミーシャは瞳を伏した。

死ぬということは、そういうものなのだろうか。

「ここではね、死ぬってというのは、ここでの暮らしの終わり、別の暮らしへの始まりなんだって。だから、引越してみたいな、そういう感覚みたい」

「……………」

ミーシャの返事はなかったが、ロゼは茶の入った器に目を落とし、続けた。

「死ぬってというのは、どういうこと？」

ミーシャはこたえられなかった。

「生きるってというのは、どういうこと？」

ミーシャは、こたえられなかった。

ロゼは、随分と色々なことを考えるようになった。

顔を洗うために宿の裏の泉にやってきて、泉の前にぺたりと座り込み、ミーシャはぼんやりとそんなことを考えていた。

澄んだ水を両手ですくい、顔を洗う。揺れた水面に、情けない顔が映った。

「あなたの心は」

ミーシャは手をのびし、水面に揺れる自分の顔に触れる。

心は、聞こえてこない。

「……わたしの心は、どこにあるのかな」
瞳を伏せた。

色々なことを考え、成長していくロゼ。喜ばしいことなのだろうが、素直に喜べない自分がいる。

あんなに真っ白だった、生まれたての心も、やがて変化していくのだ。

生きているというのは、きつと、そういうことだ。

ばしゃりと乱暴に手を入れて、自分の顔をかき消した。

「大嫌い。心なんて、大嫌い。なければいいのに」

アスフェルに触れたとき、心が聞こえてこなかった。あんなことは初めてだった。

あれほど心が聞こえることを嫌悪していたのに、聞こえないことに恐怖を覚えた。

「聞きたくないのに。聞こえないと、怖いなんて……」

「奇跡の神子ともあろう方が、何をお悩みですか？」

「！」

突然背後から聞こえてきた声に、ミーシャはとっさに身を翻した。

ピースル特有の素早さで跳躍し、姿勢を低くして声の主を見る。

「！ あなた……！」

「お久しぶりでございます、神子」

声の主は大仰に一礼した。随分と痩せたディンディゴの男だ。黒い前髪の下から覗かせた大きな目は、いやらしく細められている。

ミーシャはこの男を見たことがあった。そしてその名も、察した。「あなた、フィエルテッドントワールね……」

「さすが奇跡の神子。そのとおりでございます。そしてあなたなら私のやるうとしてしていることも、もちろん、おわかりですね？」

張りつかせたような笑顔に寒気を感じながらも、ミーシャはゆっくりと、首を左右に振った。この男が、セプテンの奇跡の腕輪を盗んだということはある。しかし、そのことと自分との関係がわからない。

「わからないわ……」

「わからない？ はっ、とぼけるな」

笑顔は張りつかせたままで、フィエルテはミーシャに近づいた。

「あなたと一緒にいる、ドールがいるだろう。やつが持つてるはずだ。それを返してほしいだけだ。別にあんたらをどうこうしようとしてわけじゃない」

「あなた、このあいだもそんなこといつてたみたいだけど……勘違いしてる。どうしてそう思うの？ 盗んだのは、あなたでしょう？」

「ロゼは何も持つてなんか……」

「オレには全部わかってんだよ！ あなたみたいに、キレイなところとちやほやされてきた嬢ちゃんにはわからないだろうが、オレにはわかるんだ！」

突然の大きな声に、ミーシャはびくりと身を震わせた。このまま言葉を交わすだけではすまないだろう。襲われたとして、逃げられるだろうか。様々な可能性を、必死で考える。

「ドールがなんの力もなく、自力で動きだすわけがないだろう。オレのエスペランスを持つてるはずだ！ あの野郎、人の物を横取り

して、どういうつもりだ！」

いつのまにか、フィエルテはミーシャのすぐ目の前まで来ていた。さつき逃げればよかった、いまならまだ……そんな考えがよぎるが、足がすくんで、動けない。

「あんたは人質だ、神子。エスペランスを取り返してやる。さあ、おとなしくついてこい」

「……………」

ミーシャは動かない。

気持ちよりも先に全身が怯え、動けない。

「さあ！」

フィエルテは、ミーシャの肩を思い切りつかんだ。

「……………」

ミーシャは硬直した。フィエルテの思いが流れこんでくる。黒く、重いものが、入り込んでくる。

「いや……………」

ミーシャは手を振り払おうともがくが、彼の思いはとめどなく流れこんできた。ミーシャの目から、ぼろぼろと涙がこぼれる。

「やめて、離して、はなして……………やめて……………」

それは怒り、悲しみ、憎しみ……………表しきれない思い。ミーシャの口からは甲高い悲鳴のような声が漏れる。

「いやあ……………」

「うるさい、早く来い！」

フィエルテは泣き叫ぶミーシャを無理やり肩に担いだ。一際大きな悲鳴を上げて気を失ったが、かまわずに走りだす。

とりあえず身を隠さなければ、この少女を隠さなければ、そして交渉すれば、エスペランスは手に入るはず……………フィエルテはほくそ笑い、遺跡へと走った。

しかし、すぐに背後から鋭い声がかげられた。見つかったことを悟ったが、それでも彼は走り続けた。

「ミーシャ！」

胸騒ぎを覚えて様子を見にきたロゼは、長身のディンディゴの男が走り去ろうとしているのを目撃した。見間違えるはずはないその肩に抱えられていたのは、ミーシャだ。考えるよりも先に、走りだす。

「止まれ！ ミーシャを離せ！」

もちろん、止まる気配はない。ロゼは、ひどく心が乱れているのを、冷静に感じているような、妙な感覚に陥った。ミーシャが連れ去られていくことなど、あつてはならない。外気を感じないほどに寒気がする。

男は、町を囲む柵を飛び越え、整備されていない荒れた道を通り続ける。しかし、ミーシャを抱えたディンディゴの足だ。ロゼとの差は徐々に縮まっていた。

こんなときに、アスフェルは一体どこに行ったのかと、唇を噛む。ちょうどそのとき、ロゼから見てディンディゴの男よりも更に向こう側に、アスフェルの姿が見えた。

アスフェルがこちらに気づく。それでもロゼは声を張り上げた。

「アスフェル！ ミーシャを……！」

アスフェルはすぐに察知して鞭を構える。フィエルテはするどく舌打ちし、右手に続く森に飛び込んだ。二人がそれに続く。

「どうして！ こんなときに、どこに行つてたっ？」

アスフェルに向かってロゼが怒鳴りつける。後悔するように唇を噛み、アスフェルはスピードをあげた。

「あいつは？」

「知らない、でも、会ったことがある。そのときは、わけのわからないことをいつてた」

それを聞いて、アスフェルも思い出す。介入はしなかったが、そのときもロゼたちの様子をうかがっていた。妙な男だ。

「黒鳥を使って襲ったのもあいつだろうな……つくそ！」

アスフェルは一気に距離をつめると、フィエルテの足元に鋭く鞭

をふるわせた。彼は短く悲鳴を上げ、バランスを崩す。

そこへロゼが飛びかかろうと跳躍する。しかし、どこから現れた黒鳥が、二人に襲いかかった。

「うわ！」

ロゼが倒れ、アスフェルが素早く黒鳥を叩き落とすが、フィエルテはよるめきながらも走り続けていく。黒鳥は何匹も現れ、倒しながらではなかなか前へ進めない。このままでは見失う。そう思ったときだった。

視界が開けた。セプテンの遺跡だ。

「ここは？」

「…… やっかいなところに逃げ込んだな。追うぞ！」

見たことのないような厳しい顔で、アスフェルが走る。いわれるまでもなく、ロゼも後を追う。

しかし、彼はもう逃げなかった。突き当たりで立ち止まり、すぐ後ろにまで迫る二人を確認して、もう逃げられないと悟る。フィエルテは短剣を引き抜き、気絶しているミーシャに突きつけた。

「止まるんだ！ 止まるんだ……わかるな？ こっちには人質がいる。いいか、動くんじゃない」

ロゼとアスフェルが、立ち止まる。フィエルテは、短剣をミーシャの頬にびたりとつけながら、頭のなかで必死に考えていた。ミーシャを攫い、隠しておくはずだったのに、追いつかれてしまった。一度立てた計画が崩れることを嫌悪するフィエルテにとって、今のこの状況は混乱をもたらすものでしかない。

「いいか？ ロゼ、という名だな……貴様、奇跡の腕輪を……なにか、腕輪を、持っているはずだ。いいか、それを、渡すんだ。神子と交換だ。わかるな？」

「……前もいった。腕輪なんて、持ってない」

「いいから渡すんだ！ 神子を殺すぞっ、いいんだな？」

「……！」

かっとして身を乗り出すロゼを制し、アスフェルが口を開いた。

「なるほど……あんたがフィエルテなんたらってやつか。そもそも奇跡の腕輪つてのはあんたが神殿から盗んだんだろう、どうしてそれをロゼが持つてるって話になるんだ？」

「黙れ！ 余計なことはいい！ こいつが持つてるはずなんだ！」
「……落ち着け。こつちとしては嬢ちゃんを返してもらいたいだけだ。その奇跡の腕輪つてのにははつきりいつて興味がない。もしこつちが持つてるものなら、喜んで渡す。でもわかんないものは渡しようがない」

フィエルテは黙ってアスフェルを見つめた。もつともなことをいつているように聞こえる。しかしそれを認めてしまつては、もう何を求めて進めばいいのかわからなくなつてしまう。

フィエルテはゆっくりと後ろへ下がつた。混乱した頭のなかで、とにかくこの場から逃げなければ、と考える。冷静な判断など、到底できる状態ではなかった。

フィエルテの合図で四方から黒鳥が出現し、二人に襲いかかった。一瞬の隙をついて、フィエルテはロゼの横をすり抜ける。

「ま、待て！」

ロゼも後を追う。アスフェルは一人で黒鳥を数匹相手する形になり、舌打ちしながらも鞭をふるい、遅れて走りだした。

「くそ！ くそ！ くそ！」

フィエルテの体力はもう限界に近づいていた。足がもつれて、うまく走れない。

「この！」

よるめいたフィエルテの背中めがけて、ロゼが飛びかかった。ロゼとフィエルテと、気絶しているミーシャとが、叩きつけられるように床に転がる。がんと、したたかに身体を打ち付けたフィエルテの、その真下の床が大きく波打つたように見えた。次の瞬間には、床ががらがらと崩れ落ちた。

「うわあ！」

フィエルテがつかんだ瓦礫ごと、ごっそりと床がぬけた。床の下

に広がる空洞に落ちていくフィエルテを見る余裕もなく、ロゼは崩れかけた柱になんとかしがみつく。

ロゼの身体も床に垂直になっていた。足が揺れている。つかんでいる柱も、自分の目線よりも上にある床も、今にも崩れ落ちそうだが、視界の端に捉えたミーシャのいるところも、まさに崩れようとしていた。

「ミーシャ……！ 起きて、ミーシャ！ ミーシャ！」

呼びかけるが、死んだようにぴくりとも動かない。ロゼは必死に、よじ登ろうと力を込める。

ロゼの手を、遅れて現れたアスフェルがつかんだ。

「まさか崩れるとは……。あいつは落ちたのか？」

「そんなことより、ミーシャを！」

「そりゃ無理だ。向こう側には……」

届かない、といおうとして、アスフェルの身体は前につんのめった。大きな振動。そして轟音。

床が落ちたのだと、ロゼが理解するより早く、彼の意識は遠退いた。

選択

1

ロゼにとつての始まりは、少女の淋しそうな笑顔。
あなたみたいになりたいという、少女の言葉。

目を覚まそうと、そう思った。

この少女と、共にいたいと。

「思った」ときには、もう、始まっていたのかもしれない。

*

「……目が覚めたか」

ぼんやりとした視界に、アスフェルの大きな上着のようなものが映った。ロゼはゆっくりと瞬く。頭のなかがはつきりしない。そして、突然思い出したように跳ね起きた。

「ミーシャ!」

「横でまだ寝てるよ。落ち着けて」

こちらを見ているアスフェルと目が合って、ロゼは急に現実に戻されたような気分になった。隣を見る。ミーシャが横たわっていた。

「床が……そう、床が、落ちて、ぼくらも落ちて……じゃあ、ここは、遺跡の下?」

床が抜けて、落ちたことは覚えている。その先がわからないということは、気を失ってしまったのだろう。

アスフェルは、肩をすくめてみせた。

「正解のような、はずれのような」

「どういうこと？」

「どういうことだと思う？」

そのまま問いかけられ、ロゼは考えてみる。遺跡から落ちたのだから、遺跡の下にいると考えるのが普通だ。

それとも、気を失っている間にアスフェルが移動させたのだろうか。考えているうちに、ロゼはあることに気づいた。

かすかな音。擦るような、隙間から吹く風のような、何か音が聞こえる。ロゼは初めて、いま自分がいる場所を見た。

「……ここ、どこ？」

遺跡の下、とってしまつには、あまりに狭い空間だった。すぐ手が届くところに壁があり、半円形のドームのようになっていて。床が崩れて、その下に落ちたはずなのに、立ち上がれないほど低いところに天井があつた。

「どこ、っていわれても、正確な位置はわからないんだけど……俺たちはいま、リリン・ドゥーアに向かつてる。それは確かだ」

「リリン・ドゥーア？ どういうこと？」

ロゼにはもう、何が何だかわからない。

「わかりやすくいうと……そうだなあ、地面の下に、たくさんの管があるとする」

右手で地面を、左手の指で管を表しながら、アスフェルが説明する。

「うん」

「で、その管は、ある一つの場所に向かつて進んでいる」

「……。うん」

うなずいてみたものの、もうついていけなくなってしまった。

「ま、理屈はいいや。とにかく、地面の下にはたくさんの管があつて、そのなかに乗り物みたいなもんがある。それが進んでると思えばいい」

「うん」

「その乗り物の行き着く先が、リリン・ドゥーアってわけ」
ロゼは、もう一度まわりを見た。耳をすまして音を聞き、理解する。

「ぼくたちは、遺跡から下に落ちて、その乗り物に乗ったってこと？ この音は、この乗り物が動いてる音だね……」

「うーん。正解、けどちょっと不正解」

アスフェルは、人差し指を立てて、にんまりと笑った。

「リリン・ドゥーアに行くのに、近道するっていったらう、覚えてるか？ あの遺跡は、そもそもこの乗り物の乗り場だったわけだ。落ちて乗った、っていうと、偶然っぽいけど、そうじゃない。まあ、床が落ちたのはさすがに驚いたけどな。俺たちは乗り場に来た。そして、乗り物に乗った。その手段が落下だった……まあ、そういうこと」

「……………」

ロゼはうつむき、考える。どうしてこんなものがあるのか、という問いの答えは、なぜか自然に頭に浮かんだ。

「……………ニンゲンを、リリン・ドゥーアに集めたんだね。昔。人形に

……………ドールに、するために」

それは、考えて出たことなのか、記憶なのかはわからないが。

ロゼの言葉に、アスフェルは驚いたようだったが、そのまま続けた。

「そう。なぜ、リリン・ドゥーアが死んだ町といわれるのか、何もない町といわれるのか……それは、リリン・ドゥーアが、町の形をした巨大なドール生産工場だったからだ。ニンゲンが集まった町……

…ニンゲンが、進化した町」

「それが、リリン・ドゥーア……………」

ぽつりと、ロゼは呟いた。一瞬、悲しいような気持ちが悪化する。

「いま俺たちが乗ってるのは、そのときの運搬手段、移動手段だ。過去の遺産だね。こんなもの、今の技術じゃ作れない」

「……………うん」

窓もなく、光源も見当たらないのに、ぼんやりと明るいのも、過去の遺産というやつなのだろう。ロゼは眠り続けるミーシャの頭をそっと撫で、ひどく落ち着いた気持ちでいた。

新しい場所に行くという心境ではない。もちろん、凄まじい技術を前に、驚いているというわけでもない。

「ついでにいうと、この乗り物はすごい速さで進んでる。途中で出たいとか思わないほうがいい。んで、忘れてるみたいだけど……真つ先に落ちてったあの黒いおっさんも、この管の前の方にいるはずだ。二メートルぐらいずつ部屋みたいになってるから、どのみち接触できないけど。乗り物つつつても、ずっと動いてるものだから、乗ったら最後、リリンに着くまでは出られないよ」

情報を吐き出して、アスフェルは身体を反り返らせて伸びをした。冷たい感触の床に寝転がり、ロゼとミーシャに背を向ける。

「あんたは賢いからわかるだろう。着くまで何もできない。嬢ちゃんみたいに、寝んのが得策だ」

「……アスフェルは、どうしてこんなこと、知っているの？」

ロゼの問いに、アスフェルはいつものも飄々とした声で答えた。

「リリンは俺の故郷だ。知ってて当然だろ」

どれほどの時間が過ぎたのだろう。

外の光は入らないので、何度朝を迎えたかわからない。何日も過ぎたような、ひよっとしたら一日も過ぎていないような、不思議な感覚だ。

ロゼたちの『乗り物』は、当たり前のように突然止まった。

ぎゃいんと、止まるときに一度だけ響いた金属音が、逆に嘘らしく感じられる。ドームのようになっていた天井が横に開き、遠くに明かりが見えた。

ずっと眠り続けているミーシャを抱え、ロゼはアスフェルに続いて乗り物を降りた。少し歩いたところにあった、長い長い階段を抜けると、そこはもう、町だった。

「ここが、リリン・ドゥーア？」

驚いたように口を開けているロゼを見て、アスフェルが苦笑する。彼は少女のように上着の裾を両手で摘むと、一礼してみせた。

「そのとおり。ようこそ、リリン・ドゥーアへ」

日の光は眩しく、ずっと地下にいたロゼにとっては痛いほどだった。幅の広い道の両脇に立ち並ぶ家屋の、その白い色に反射して、より一層明るくなっているようだ。

「……ぼくがいた、町みたいだ……」

古めかしい、しかし生活のあとのない白い家のなかを覗くと、動かないドールが、飾り物のようにあった。自分が目を覚ました白い町のことを思い出し、ロゼは複雑な思いでドールから目をそらす。

「とりあえず、嬢ちゃんをちゃんと寝かせないと……ついてきて」
そういつて、アスフェルはすたすと歩きだした。

*

閉じこめられたのだと、フィエルテは思った。

目を覚ましてみれば、薄暗い小さな部屋のなかにいたからだ。部屋というにはあまりにも天井が低く、ケースのなかに入れられたようだった。

そのケースには窓も隙間もないようだったが、呼吸が苦しくなるというわけではなかった。しかし、一向に出られる気配もない。

何か小さな音が、耳鳴りのように聞こえるだけだ。一体、どうなってしまったのか、まったくわからない。

ケースから出ることができないとわかってからは、ただじっとしていた。最愛の妹のことを思い、憎いドールのことを思い、じっとうずくまっていた。

突然、固いものを擦り合わせたような低い音とともに、地震のよくな揺れを感じて、がくと身体が動いた。ケースが開き、外に出て初めて、今までいたケースが動いていたのだと、さっきのは揺れ

たのではなくて止まったのだと、わかった。

彼は階段を見つげ、光に目を細め……

愕然とした。

「……白い町、だと……？」

広い道の両脇に、不自然なほどに整然と並ぶ白い家々。フィエルテは、よろよると歩きだす。

「戻ってきたのか……？」

彼は走りだした。

ならば、ディアナがいるはずだと、最愛の妹を求めて。

2

夢を見た。

幼いころの夢。

まだ、神殿に売られる前の、母に愛されていたころの、幸せな夢。

「むかしむかし、あるところに……」

お母さん、それじゃなくて！ ねえ、あのお話して、ニ

ンゲンのお話！

「あら、またニンゲンのお話？ ミーシャはニンゲンのお話が大好きね」

いいから、ねえ、ねえ、お話して！

「ええ、いいわよ……」

母親が話してくれる。

ミーシャはその話が、その時間が、大好きだった。

ねえ、じゃあ、最後のニンゲンは、今も、リリン・ドウ

ーアにいるの？

「そう。ひとりぼっちになってしまったニンゲンは、世の中のこ

とを嫌って、たったひとりで、暮らしているのよ」

ミーシャ、大きくなったら、ニンゲンに会いにいきたくない。だってひとりじゃ 寂しいもの。ミーシャが一緒なら、きっと寂しくないと思うの！

そして、大きくなったミーシャが、森にいた。

神殿を逃げ出し、毎日泣き崩れる母と共に、森で暮らした。

ねえ、ヴィオレお婆ちゃん。ニンゲンのお話、知ってる？

「当然、知ってるさね。ビースルの間で語り継がれる、お伽話さ」

わたし、ニンゲンに、会いにいきたくないな。

「ひっひっ、なんでそんなこと思うんだい」

お願いしたいことがあるの。

ずっと昔から決めていた。ニンゲンに会って、伝えたい願い。

その願いは、ずっと、ずっと、色褪せることなく、ミーシャの胸のなかにある。

お願いしたいことがあるの。

だから、リリン・ドゥーアに、

いつか

ニンゲンに、お願いしたいことがあるの

ミーシャは跳ね起きた。

開け放たれた窓から風が訪れ、自分がひどく汗をかいていることを自覚する。ゆっくりと首を左右に振り、毛布を足よりもさらに向こうに追いやって、もう一度寝転がった。ふかふかの感触に軽く身体が跳ねて、ベッドで寝るのなんて久しぶりだと、ぼんやり思う。そしてもう一度、跳ね起きた。

「え？ わたし……」

何だか恐くなって、もう一度毛布をひっぱってきて抱き締める。なぜ、ベッドで寝ているのだろうか。トリコの町にいたはずではなかったか。

カーテンもない、ただ切り抜かれただけの窓から、外を見る。道の向こうに、白い家屋が並んでいるのが見えた。

「白い町……まさか、帰ってきたの？」

しかし、毎日通い続けたあの白い町とは、どこか違うように思えた。具体的に何が違うというわけではないが、知らない風景のような気がする。

ミーシャは、だんだん思い出してきた。

トリコの町にいたこと。

フィエルテに会ったこと。

その心を、聞いたこと。

「……わたし……」

身体が、小刻みに震えだす。ミーシャは、首をゆっくりと振った。……わたし、行かなきゃ……リリン・ドゥーアに、行かなきゃ……

……早く……」

震える足をベッドからおろし、ミーシャはふらつきながらも歩きだした。

その建物は、他の白い家と比べると、ずいぶん大きいようだった。なかにある家具も装飾品も、すべて白い色をしている。生活の気配が全くないという意味では、他の家々と同じだ。

ロゼは、アスフェルの後ろを黙って歩いていた。部屋にひとりで寝かしてきたミーシャのことが気になったが、おとなしくアスフェルに続く。

白い廊下の突き当たりに、あまり大きくもない部屋があった。扉を開けて、なかに入る。

部屋のなかは薄暗かったが、アスフェルが壁に触れると、昼間のように明るくなった。

部屋の中央に、ちょうど人がひとり乗るぐらいの、四角い白い台が一つ。部屋の奥とその両脇には、ロゼが見たこともないような、物々しい器具のようなものが並んでいた。

「ここは……？」

「何も感じないか？」

問われて、ロゼは首を傾げる。

「どうして？」

アスフェルはロゼに背を向けて、台にそつと触れた。

「ドールは、こういう場所で作られたんだ」

「……ドールが、生まれた場所？」

そういわれても、ぴんとこない。ロゼは、ゆっくり部屋を見渡した。しかしやはり、初めて来た場所という認識しかできない。

「リリン・ドゥーアは死んだ町だ。あるのは、こんな、過去の遺産だけ。ニンゲンなんていないんだ。最後のニンゲンは、俺たちを作つて、死んだ」

アスフェルが、意を決したように、ロゼを見た。

「ロゼ、わかつてるだろう。俺は、最初から、わざとおまえたちに近づいた。そして俺がなんなのか……それも、わかっているはずだ」
ロゼはアスフェルの目を見つめた。

そんなことはわかつていた。しかしそれを口にすることに、どれだけの意味があるのか。

「アスフェルがドールだということが、何か目的があつてここに連れてきたということが、そんなにいけないこと？」

疑問を、素直に口にしていた。

「何を悔いているの？」

アスフェルは、ロゼのその目を受け止めた。逸らさずに、唇を噛む。

「俺が悔やむのはこれからだ　おまえに、選択を迫らなければならぬ。なぜ、ただひとり、おまえが目覚めたんだと思う？　どうして、ここに連れてきたんだと思う？」

ロゼはこたえない。わかるはずがない。静かに、アスフェルは続けた。

「これは、ニンゲンの勝手だ」

白い台に手をつき、どこか懐かしむように　どこか辛そうに、撫でる。

「ニンゲンの勝手に、選択を迫るんだ、ロゼ。おまえに　始まりのドールであり、終わりのドールである、おまえに」

意を決したように、アスフェルはロゼの両肩をつかんだ。それは力強く、肩に爪が食い込むようだったが、それでもロゼは瞬くことすらできなかつた。

「さあ、ロゼ、『目覚めたもの』……おまえは、ここに来て、何を思う？」

家のなかには思ったよりも広く、外に出られずに、ミーシャはおぼつかない足どりでさまよい歩いていた。

不気味なほどに、どこもかしこも、白い家だ。まだ夢の続きなのではないかと思ってしまう。

小さな部屋のようなものを見つけ、ふらりとなかに入る。そこにあつたものを見て、ミーシャは鋭く息を吸い込むような悲鳴をもらした。

白く、狭い部屋の中央に、人影がある。しかしそれは、幻であるかのように、薄く、向こう側が透けて見えた。

影は、驚いたように見えたが、すぐに微笑んで一礼した。

『よつこそ、リリン・ドゥーアへ』

空気のなかに消えてしまいきような声だ。ミーシャは、ゆっくりとあどすさる。

「あ、あなた、だれ？ リリン・ドゥーアって……」

『恐れることはないよ、森の民……ピースルのお嬢さん。「目覚めさせたもの」よ』

少年の姿をした影は、やわらかく微笑んだ。その姿が誰かに似ているような気がして、ミーシャは思わずつぶやく。

「アスフェル……？」

『アス＝フェルというのは、「導くもの」の名前だよ。私は「待つもの」。ここ、リリン・ドゥーアで、ずっと君たちを待っていた』

「リリン・ドゥーア……ここは、リリン・ドゥーアなの？ ねえ、じゃあ、ニンゲンに会わせて！ リリン・ドゥーアなら、最後のニンゲンがいるはずよ！」

影は、少し寂しそうに笑って、首を左右に振った。

『ニンゲンはいないよ。最後のニンゲンは、私たちを作って死んだ』
ミーシャは、目を見開いた。

「死んだ……？ 嘘……じゃあ、わたしは……！」

ミーシャの言葉をさえぎって、影はやわらかい声で続けた。

『さあ、お嬢さん、「目覚めさせた者」。君の意志を聞こう。君は、何を思う？』

「何を思っつて……どういうこと？」

ロゼは目を瞬かせた。アスフェルは、ロゼの目を見ている。

「おまえは特別じゃないんだ、ロゼ……ドールは皆、目覚める。おまえは少し、早かったただけだ。思いを一身に受けることで、目覚めた。ドールが目覚めることを強く望むものがいれば、そのドールは動きだす。これは、プログラムされていたことだ。そのプログラムを、最後のニンゲンが、仕掛けた」

「……………」

ロゼは黙って聞いている。自分が動くことを望んだのは、ミーシヤだ。

「でも、最後のニンゲンは迷った。果たしてそれは本当にいいことなのか……ひよっとしたら、進化の妨げになるだけなのではないかと。そこで、最後のニンゲンは、俺を作ったんだ。最初に目覚めたドールと、目覚めさせたものをここにいざなうために。ドールが目覚めることを是とするか否とするかを、最初のものに聞くために。要するに、ドールをどうするかは、おまえに委ねられたわけだ。……わかるな？」

ロゼは小さくうなずいた。

「さあ、ロゼ、おまえの心を問う。もし是とするなら、ドールはこのままだ。否とするなら……二度とドールが目覚めることがないように、プログラムを断ち切る。さあ」

アスフェルは、繰り返した。

「何を、思う？」

「じゃあ、ロゼは、わたしが強く思ったから目覚めたってこと？」
『そう、利口だね、「目覚めさせたもの」。そういうことだ。そして、最初にドールを目覚めさせた君が 正確には、君と、最初に目覚めたドールが 今後のドールを、左右することになる。最後のニンゲンは、その選択を、君たちに委ねたんだよ』
影は目を細めて、ミーシヤを見下ろした。

『さあ、君は何を思う？』

ミーシヤは、ゆっくりと、何度も、首を左右に振った。

「わからない……」

わかるはずがなかった。

真っ白だったロゼの心が色々なことを感じていくことが、白くなくなっていくことが、良いことなのか悪いことなのかなど。

「わたしには、わからない……だいたい、そんなの、無責任よ……わかるわけ、ないじゃない……」

目覚めたとき、ロゼの心は真っ白だった。

今はもう、真っ白ではない。それは、成長の証。

それは良いことなのか、悪いことなのか、ミーシャには、わからない。

「この世界をあの子に見せることは、正しかったの？ わたしがあの子を目覚めさせたことは、罪ではないの？ ロゼの心はあんなに綺麗だったのに……わたしが染めたの、わたしが、よごしてしまったの」

ぼろぼろと涙がこぼれた。

最後の町を訪れることを望んだ。最後のニンゲンに会うことを望んでいた。それは、目的があったからだ。

「なのにわたしは、まったく反対のことを、してしまったの」

ミーシャは、影を見上げた。なにかもが理不尽に思えた。

「どうしてわたしが、選択しなくちゃいけないの」

『この世界で、だれよりも、ドールを想ったのが君だったからだよ』
「想った……？」

確かに、ミーシャは想った。

しかしそれは、ロゼを目覚めさせるためのものではなかった。

「わたし、ドールを想ったわ……だって、願いが、あったから。だからここに来たの。だから、ここに来たのに！」

ミーシャは、影を睨めつけた。

こんなはずではなかった。

自分には、選択する資格などないのだ。

「あなた、勝手だわ。いつまでもそうやって、だれかを頼っていればいい……自分で考えることもしないで」

姿勢を低くすると、ミーシャは高く跳躍した。影の横をすり抜けて、窓から身を躍らせる。

最後にちらりと影を振り返ったが、何もいわなかった。

「ぼくには、わからないよ」

ロゼは、自嘲するようにそうつぶやいた。

「わからない……？」

「ぼくはね、思うんだ。ドールは、動いている人にとっては動いてないけれど、ドールにとってはそれが当たり前で、そうやって暮らしていたんじゃないかって……。うまく、いえないけど、ドールにとっては、動いてないことのほうが、自然な状態で、いろんなことを考えて、生きていたんじゃないかって」

ロゼは静かな表情で告げた。

「だからそれはきつと、ぼくが決めていいことじゃない」
「……………」

アスフェルは目をそらさない。

それは、アスフェル自身も思ってきたことだった。

もう、気の遠くなるほどの昔、ニンゲンの手で生を受けてから、ずっと思っていた。ドールの監視をしながら、静かに、穏やかに過ぎていく毎日のなかで、思い続けてきた。

そもそも、ドールを、目覚めさせる必要があるのか。

いまのこの世界に、波をたてる必要があるのか。

「アスフェルは、どう思うの？ 目覚めさせた方がいいと、思っている？」

くっ、とアスフェルは笑った。

「まさか、俺が聞かれる側になるとはな」

「予想できたことでしょう、アスフェル」

突然、低い、感情を押し殺したような声が響いた。

部屋の入り口に、ひどく冷たい目をしたミーシャが立っていた。

「ミーシャ！ 目が覚めたんだね」

すぐにロゼが駆け寄るが、ミーシャは一瞥しただけで、視線をアスフェルに戻す。

「無責任で、自分勝手……ヒトなんて、みんなそう。ニンゲンもそうだったのね。ただの責任放棄であなたたちを作って、見届けずに死んでしまった」

「……そうか、聞いたんだな」
「ばかみたい、とミーシャはつぶやいた。
何をしに、こんなところまで来たのだろう。
ニンゲンには会えず、結局、嫌な思いをしただけだ。
もう、どうでもいい 選択なんて、関係ない」

*

妹がいた。

最愛の妹だ。

両親を早くになくし、二人で生きてきた。

体の弱い妹は、健気に家事をこなし、働き続ける兄を支えた。

ささやかな幸せ。しかし、十分な幸せ。

だが、妹は死んだ。

流行病で、あっけなく、命を落とした。

救いを求めて入信したセプテンでは、信仰こそがすべてを救うと
教えられた。

願った。

妹が、生き返るようと。

そうして、あるとき、白い町でドールを見た。

妹に酷似した、少女のドール。

このドールは妹なのだと、妹に間違いないと思うようになったの
はいつのことだっただろう。

そんなことがあるはずはないと理解していたが、心は信じてしま
っていた。

妹がここにいる。

救わなければ。

救い出さなければ。

フィエルテは、町をさまよい歩いていた。

ここがずっと通い続けてきた白い町ではないということには、すぐにわかった。しかしそれは、なんの解決にもならない。

もう、限界だ。

一刻も早く、エスペランスを取り返さなければ。

妹を、救わなければ。

フィエルテは町中を歩き回り、一軒だけ他の家よりも大きい家を見つけた。

警戒しながらも足を踏み入れると、人の気配がした。彼は、直感を信じ、迷わず家のなかを突き進んだ。

突き当たりの部屋には、思ったとおり、ドールの少年がいた。フィエルテは、喜びのあまり、高らかに笑った。

「やっと見つけた！ 追い詰めたぞ……！ さあ、奇跡の腕輪を渡すんだ！」

ロゼとミーシャが振り返り、アスフェルは右手を額にあてた。

「そういえば、いたなあ、あんた。正直、それどころじゃないんだけど」

「おとなしく渡せ。そうすれば、危害は加えない。エスペランスさえあれば、救うことができるんだ……！ さあ！」

その目は、ロゼを見ているようで、しかし遠くを見ているようでもあった。頬は紅潮し、必死になっているのに、心はどこか遠くにあるようであった。

「持っていないよ」

静かに、ロゼが告げた。フィエルテはせせら笑う。

「嘘をつくな。ならどうして、お前が ドールが、動いている？」

「それこそ奇跡だ！ エスペランスの力だろう！」

「あなた、エスペランスなんて、本気で信じてるの」

ロゼの隣で、ミーシャが怒りと哀れみの入り交じった声を出した。

「神殿なんて、お金儲けしているだけ。ただの腕輪に決まっている」

奇跡の神子の言葉に、さすがに怯む。アスフェルが続けた。

「その腕輪がどういふものは知らないけど……ロゼが動いている

ことには、本当に関係ない。ドールは動き出すんだ。だれかが強く思えば、それだけで。ロゼはミーシャの思いを受けて、動き出した。それが、ドールのプログラムだ」

「……………」

フィエルテは、ロゼとミーシャと、アスフェルとをゆっくりと見て、考えるように沈黙した。そうして、静かに、笑い出した。

「邪魔を、するのか」

もう、目の焦点が合っていないかった。

彼はひどくゆっくりと、懐から短身のナイフを取り出す。作り物のように静かな動きに、ロゼたちには、それが意味するところが何なのか、一瞬わからない。

それからの動きは素早かった。

「なら、ドールを壊して、エスペランスを取り返すまでだ！」

フィエルテは床を蹴り、ナイフを振り上げた。それを上回る速さで、ミーシャが身を翻す。

ロゼは目を見開いた。

ロゼの目の前で、ミーシャが崩れ落ち、鮮血が飛び散った。

「てめえっ」

アスフェルが飛び出し、フィエルテの手をねじり上げる。彼は血を浴び、恍惚とした表情で声を上げた。

「赤い！ 奇跡の神子の血も赤いんだな！ この血が、この血があればディアナは生き返るかも知れない！ なんせ神子の血だ……………」

完全に、心が、どこかへ行っていた。殴りつけようとして、アスフェルはそのまま手を下ろす。

その必要はなかった。

もうこの男には、何をする力も残っていないかった。

「ミーシャ……………」

ロゼは、ミーシャを抱き寄せた。

ミーシャは、流れ込んでくるロゼの気持ちに、微笑む。

「ごめんね……………わたしは、あなたを、目覚めさせちゃいけなかった

のかも知れない。ドールは、ドールのままでいたほうが、幸せだったんだ、きつと」

でも、この気持ちはなんなのだろう　ミーシャの目に涙がにじむ。

もう、ロゼの心は真っ白ではない。

しかし、こんなにも、あたたかい。

これはいけないこと？

「ミーシャ、ぼくは、ぼくはね、目覚めてよかったよ。ミーシャと同じ時間を過ごせることが、本当に幸せなんだ。だから、ミーシャ

」

「ごめんね」

謝罪を告げて、ミーシャはアスフェルを見た。

胸から流れる血は止まらなかったが、その瞳は、力強い意志を宿していた。

「お願いがあるの」

そのために、ここに来た。

白い町で、ずっと抱いていた想い。

ミーシャは、微笑むようにして、願いを告げた。

「じゃなきゃわたし、壊れてしまうから」

3

スタンドグラスから、色彩豊かな光が差し込むなかで、白いローブを着た老人は、優雅に茶をすすっていた。白いテーブルの上にカップを置き、小さく息をつく。

「キリン＝ルーシ。遅かったですね」

振り返らずに投げかけられた言葉に、同じく白いローブを着た男性が、どきりと身を硬直させた。

「は、ルーンセイグ老。それが、町の骨董屋では、たいしたものか

……」

「なにも、怒っているわけではありません。心配していたのですよ。ルーンセイグは微笑して、キリンを招き寄せる。

キリンは、恐縮しながら、白テーブルの上に懐から取り出した布を敷いた。その上に、紫色の包みを置く。

「このようなものしか……」

「かまいません。ご苦労でしたね、キリン。ルーンシ。白の神官であるあなたに、このようなことをやらせて」

「いえ、いえ、そんな……」

こんこんと、控えめなノックの音が響いた。誰だ、と、ルーンセイグに対するときとはまるで別人のような声で、キリンが声を張り上げる。

「失礼します。ファレイ。ミラ殿がお帰りになったのですが……」

消え入るような声に、ルーンセイグが優しい声音で、しかし有無をいわさぬ調子でこたえる。

「ファレイ。ミラ、入りなさい。ファレイ。ミラだけです。あとのものは、入ってはなりません」

ややあつて、あちこちに包帯を巻いた赤の神官、ファレイが足を引きずりながら現れた。その姿を見て、キリンが眉根を寄せる。

「このような姿で、失礼します、ルーンセイグ老」

「よく帰りました、ファレイ。ミラ。ずいぶんと、大変な目にあつたようですね」

「いえ……」

ファレイはうつむいて、そのまま黙ってしまった。その身体が、小刻みに震えだす。

「どうしたんだ、ファレイ。ミラ。報告に来たのだろう！」

キリンにいわれ、ファレイは顔を上げる。悔しさと情けなさで震える体をなんとか沈め、彼女は押し殺した声を搾り出した。

「……申し訳、ございません……奇跡の腕輪、エスペランスを取り

返すことは、できませんでした……！」

ファレイを見下ろし、ルーンセイグは優しく微笑んだ。
「そうですか」

返ってきたのは、たったの一言。ファレイは恐る恐る、ルーンセイグの顔を見上げる。

「わ、私は……！ この責任をとって、セプテン神のために……！」
「ファレイ＝ミラ」

相変わらずの優しい声で、その名を呼ぶ。はい、と小さく、彼女は返事をした。

「奇跡とは、何だと思えますか？」

「は…… 奇跡、ですか？ それはもちろん……」

「奇跡などありません」

白の神官は、残酷な言葉を吐いた。ファレイを見下ろし、笑顔で続ける。

「奇跡は、奇跡という形であるのではない。それを奇跡と呼ぶのは人です。奇跡は人のなかにある」

「し、しかし！ お言葉ですが、セプテン様は……！」

哀れみさえ含んだ目で、ルーンセイグはもう一度微笑んだ。

「神などいない。神を信じるのも人です。神も、人のなかにいる」

「……っ」

ファレイの頭のなかは、真っ白になっていた。もっとも尊敬する神官の口から出てくる言葉の意味が、わからない。

ルーンセイグは、キリンが持ってきた紫色の包みを厳かに開いた。中には、数個の指輪や腕輪などが入っている。

彼はそれをいくつか物色すると、最後に一つ、古ぼけた指輪のようなものを手にとった。

「ふむ……これで、いいでしょう」

何のことかわからずに、ファレイはただ白の神官を見上げる。

「奇跡の腕輪はその効力を失った。今からはこの指輪が神の指輪……新しいエスペランスとして、この神殿に祀りましょう」

「……え？」

ファレイは目を見開いて、ルーンセイグと、その手のなかにある指輪を見る。

「愚かものがありました。奇跡の腕輪があれば、死んだ妹を生き返らせることができるのだと信じ、腕輪を盗んだ愚かものが。あれも、もともとは、骨董屋で仕入れたただの銀の腕輪だというのにね……」
ルーンセイグは優雅に屈み、ファレイの肩に手を置くと、ひどく優しく笑った。

「あなたは頑張りました。きっと、神のご加護があるでしょう」
ファレイは、ゆっくりと、首を左右に振った。

始まり

『勝手だといわれたよ』

白い部屋の片隅で、影はつぶやいた。

「俺は無責任ともいわれたな」

アスフェルがこたえて、それから顔を見合わせる。

長い、長い間、何をやってきたのだろう。

選択をはねつけられる可能性など、考えもしなかった。

『どうしようか、アス＝フェル』

「どうするかな」

アスフェルは、窓から身を乗り出し、静まりかえっている町を見た。

本当は、もう、心は決まっている。

『わたしはここから動くことはできないが、気にすることはないよ』

アスフェルは笑った。振り返るようにして影を見る。

「じゃ、行くわ」

再び、白い町へと。

見届けるために。

*

少女は目を開けた。わけがわからずに わけがわからないとい

うことも、わからずに、自分の手を持ち上げて、見た。

動いている。

動いていることは、当たり前のことなのか、不思議なことなのか、わからない。

会すべきひとがないような気がして、少女は足を踏み出した。

家から出ると、幅の広い道があった。道の向こう側に見えるのは、似たような形をした白い家ばかり。右も左もわからずに、ただ立つ

ていると、双子の少女が現れた。

「こんにちは！」

「こんにちは！」

少女は少し驚いたが、笑ってあいさつを返す。

「初めまして！」

「初めまして！ お姉さん、お名前は？」

少女は、名を答えようとして、少し考えた。

名前なら、ある。

しかし、ずっと呼びかけてくれていた名は、他にある。

彼女は微笑んで、こう答えた。

「ディアナ」

「ディアナお姉さん！ 綺麗な名前ですね」

「ねー！」

ふと、片方の少女の首もとにある飾りに、目が止まった。

「とても、綺麗ね」

「これ？ えへへー、拾ったの！」

「もうずーっと前！ この町に探険にきたらねえ、落ちたての！」

「そうだ！ ディアナお姉さん、お近づきのしるしに、どうぞ」

「うん！ どうぞ！」

双子の少女は、首から下げていた飾りを外し、手渡した。受け取ってみると、それはペンダントではなく、腕輪だった。月をモチーフにしたデザインの、古めかしいその腕輪は、一生懸命研いだのだろう、銀色に輝いている。

「ありがとう」

少女は腕輪をはめて、微笑んだ。

「ディアナお姉さんはここで、何をしてるの？」

その問いに、少女は自分に答えるように、つぶやく。

「私は……ひとを、待っているの。私を、強く想ってくれたひとを」

「約束しているの？」

少女は、柔らかく、笑った。

一つだけ、覚えていることがある。
「私は、そのひとのために、目覚めたの」

ミーシャの願いは聞き届けられた。

願いがかなったその日から、月日は流れ、かつてミーシャがかよっていた白い家の、ミーシャが座っていた場所に、ロゼがいた。

ロゼが、優しく見守るのは、獣の耳と尻尾をもつ、少女の姿をしたドール。

強い想いを抱いて、彼は、そこにいる。

「君がいなければ、ぼくはいなかったんだ」

ロゼは静かに、冷たい頬に触れた。

「ねえ、君が教えてくれた世界は、とても優しいよ」

暖かい陽の光が差し込み、部屋のなかの空気を揺らしていた。

昔、彼女がそうしてくれたように、彼女に話しかける。

そうして、彼女が目覚めたら、彼女がしてくれたように、その手をひいて、旅に出よう。

それは、そんなに、遠い未来の話ではないはずだ。

「だから、いまは少し、お休み、ミーシャ」

ロゼは、大好きなドールの髪を撫でると、その額に優しく口づけをした。

そのときこそ、世界の綺麗なところを、たくさん

終わりの人形

始まり（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。
心から、感謝いたします。

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1640c/>

終わりの人形

2009年3月24日09時23分発行